

第5回 献血推進のあり方に関する検討会 議事次第（案）

平成21年2月17日(火)
午前10時～12時
日本教育会館9F 喜山倶楽部「平安の間」

1. 開会
2. 「採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ」からの報告について
3. 最終報告(案)について
4. その他
5. 閉 会

資料一覧

- | | |
|--------|------------------------------|
| 資料 1 | 献血推進のあり方に関する検討会 委員名簿 |
| 資料 2-1 | 採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ」報告書 |
| 資料 2-2 | 採血基準に関する各種論文等(要約)一覧表 |
| 資料 2-3 | 採血基準に関する各種論文等 |
| 資料 3-1 | 献血推進のあり方に関する検討会 最終報告(案) |
| 資料 3-2 | 献血推進のあり方に関する検討会 最終報告(案)－資料編－ |
| 参考資料 1 | わが国の採血基準(現行) |
| 参考資料 2 | 各国の採血基準一覧表[全血採血基準] |
| 参考資料 3 | 各国の採血基準一覧表[成分採血基準] |

「献血推進のあり方に関する検討会」

委員名簿

(敬称略、50音順)

	氏名	現職
1	飯沼 雅朗	社団法人日本医師会 常任理事
2	宇都木 伸	東海大学法科大学院実務法学研究科 教授
3	衛 藤 隆	東京大学大学院教育学研究科 教授
4	大平 勝美	社会福祉法人はばたき福祉事業団 理事長
5	掛川 裕通	日本赤十字社血液事業本部 副本部長
6	川内 敦文	高知県健康福祉部 医療薬務課長
7	河原 和夫	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 教授
○ 8	清水 勝	医療法人西城病院 理事
9	住友眞佐美	東京都福祉保健局 保健政策部長
10	田辺 善仁	株式会社エフエム大阪 専務取締役
11	中島 一格	東京都赤十字血液センター 所長
12	羽田真由香	全国学生献血推進協議会 委員長
13	花井 十伍	ネットワーク〈医療と人権〉 理事
14	堀田美枝子	埼玉県立浦和西高等学校 養護教諭
15	山本シュウ	株式会社アミューズ所属 ラジオDJ

○…座長

採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ報告書

1 経緯

「献血推進のあり方に関する検討会」の審議事項である「採血基準見直しの検討」について、本検討会にワーキンググループを設置し、以下(1)～(6)に掲げた個別の見直し案等についてエビデンスの検証等を行い、安全に実施可能かどうかを検討してきた結果をワーキンググループ報告書として提出するものである。

- (1) 400 mL 採血、成分採血の下限年齢の見直し
 - ・「18歳～」→「17歳～」又は「16歳～」と見直すべきか
- (2) 血小板成分採血の上限年齢の見直し
 - ・「～54歳」を引き上げるべきか
- (3) 採血基準項目の「血液比重又は血色素量」を「血色素量」に改められないか
- (4) 年間総採血量、年間採血回数、採血間隔を見直すべきか
 - ・400 mL の年間採血回数：「男性3回以内」→「男性4回以内」など
- (5) 男性の血色素量最低値を見直すべきか
 - ・現行の「12.5g/dL 以上」→「13.0g/dL 以上」など
- (6) 未成年者のインフォームド・コンセント、ドナーの安全対策についてどう考えるか(海外との比較を念頭に)
- (7) その他見直しが必要な事項

(ワーキンググループ開催実績)

- 第1回(平成21年1月9日)
 - ・個別見直し案に係る論文等について自由討議
- 第2回(平成21年2月2日)
 - ・追加提示された論文等について自由討議
 - ・ワーキンググループ報告書のとりまとめ

2 ワーキンググループ委員(敬称略、50音順)

No.	氏名	現職
1	宇都木 伸	東海大学法科大学院 実務法学研究科 教授
2	衛藤 隆	東京大学大学院 教育学研究科 教授
3	河原 和夫	東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 教授
4	柴田 玲子	日本赤十字社血液事業本部 参事 製造管理課 採血係長
○ 5	高本 滋	愛知医科大学医学部 輸血部 教授
6	中島 一格	東京都赤十字血液センター 所長
7	半田 誠	慶應義塾大学医学部 輸血・細胞療法部 教授

○座長

採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ報告書

1. 400 mL 全血献血採血基準の下限年齢の見直しについて

(問題意識)

赤血球製剤においては 400mL 献血由来製剤の需要が9割超であるにもかかわらず、現行基準ではほとんどの高校生が 200mL 献血しかできない状況がある。

高校時代の献血の実体験がその後の献血行動の動機付けとなっているなど、若年期の献血体験は極めて重要であることから、400mL 献血の下限年齢の見直しが必要ではないか。

(結論)

- ・ 日本赤十字社による年齢別の献血副作用発生率データ等から判断すると、400 mL 全血献血について、17歳男性への年齢下限拡大は可能であると考えられる。
- ・ ただし、献血者の安全を確保する観点から、特に採血前後のリスク管理を徹底するなど、献血副作用の防止策を万全にすることが必要である。
- ・ その他の年齢層(16歳男女及び17歳女性)については、引き続き検討を要する。

2. 血小板成分献血採血基準の上限年齢の見直しについて

(問題意識)

現行基準(上限年齢:54歳)は、当時の血小板の需要量を念頭に設定されており、現在の血小板製剤の使用状況に即した見直しが適当ではないか。

(結論)

- ・ 国内で得られた年齢別の献血副作用発生率データから判断すると、血小板成分献血の上限年齢については、男性に限り、69歳までの拡大が可能であると考えられる。
(ただし、65～69歳の者については、60歳に達した日から65歳に達した日の前日までの間に採血が行われた者に限る。)
- ・ 女性については、引き続き検討を要する。

3. 採血基準項目における「血液比重又は血色素量」について

(問題意識)

血色素量による検査方法の普及が進んでいることから、「血色素量」に統一すべきではないか。

(欧米では「血液比重」を用いている国は少ない。)

(結論)

- ・ 医学的には、「血色素量」に統一すべきである。
- ・ ただし、現状で使用できる検査機器が海外1社の製品のみであるため、当分の間、採血基準は原則として「血色素量」とするが、危機管理上「血液比重」で代替することも可とする。

4. 「年間総採血量、採血回数、採血間隔」及び「男性の血色素量最低値」について

(問題意識)

わが国は海外各国に比べ、特に全血採血における年間総採血量及び年間採血回数が少ない。将来の安定的な血液確保のため、特に健康な方にはより多く献血してもらえよう、これらを見直すべきではないか。

また、400 mL 全血採血における男性の血色素量最低値は、安全性の観点から12.5 g/dL から13.0 g/dL に引き上げるべきではないか。

(結論)

- ・ 「年間総採血量、採血回数、採血間隔」について、現時点では、国内の複数回献血者の血色素量推移データから、400 mL 献血を年4回安全に施行できることを担保するエビデンスは得られなかった。
- ・ 「男性の血色素量最低値」については、献血者の安全性を考慮すると、現状の採血基準から 0.5g/dL 引き上げることが妥当である(血液比重についても同様に引き上げる)。

5. インフォームド・コンセント、ドナーの安全対策について

(問題意識)

- ・ 現行の献血におけるインフォームド・コンセントのあり方について。
- ・ 保護者の同意の必要性について。

(結論)

- ① 現行の献血におけるインフォームド・コンセントのあり方について
 - ・ 現行の日本赤十字社の「お願い」は、献血者の献血時におけるリスク及び献血者健康被害救済制度に関する記載が不十分であるので充実すべきこと。
 - ・ インフォームド・コンセントの具体的な方法等については、今後、法律学等の専門家とも相談しつつ、国及び日本赤十字社において検討することとする。
- ② 保護者の同意の必要性について
 - ・ 未成年者であっても、一般的に、提案されている医療行為の性格と危険性について十分に理解する力があると認められる場合には、その行為を受けるに当たっては、親権者の承諾を必要としないと考えられる。
 - ・ 献血は定型的行為であり、数十年間にわたる極めて多数の経験を通して、いまや隠れたリスクはほとんどなく、また、その性格・危険性の理解にさほど高い能力を要求されるものではない。したがって、未成年者の献血についても、特に洞察力のある親権者によって保護される必要性は乏しく、上記の一般論に照らすと、必ずしも親権者の承諾を必要としないと考える。
 - ・ ただし、献血は、身体的には本人に何ら利益をもたらさない行為であり、慎重に取り扱われるべきものであることは言うまでもない。特に未成年の場合、疾患等の情報が本人に知らされていないこともあり得るので、献血者の献血時におけるリスク等に係る情報提供が平時から広く行われていることが必要であり、もしも親の積極的拒否のある場合には採血をしてはならないと考える。

採血基準に関する各種論文等(要約)一覧表

第1回WG提示各種論文等

資料番号	出典	対象	症例数	目的	結果
①	日本赤十字社	19年度全献血ドナー		19年度ドナー被害救済者対象	200ml献血において16~24歳までのVVR発生率は25歳以上に比較して頻度が高い。転倒率も同様の傾向にある。
②	河原班(18年度)	全血ドナー	18,726名	比重法とHb法との比較検討	比重検査の特異度低い(偽陽性、偽陰性高い)
		16-20歳初回全血献血ドナー	男性: 47,038名 女性: 43,194名	初回全血ドナーの年齢別、献血量別、重症度別にVVR発生頻度を比較	200ml献血男性ドナーでは16歳と比較し17歳-20歳のVVR発生率が高い。200ml献血女性ドナーでは16歳-17歳と比較し18-20歳のVVR発生率が高い。400ml献血では男女ともに年齢間差はなかった。
		18-20歳全血献血ドナー	男性: 14,191名 女性: 12,503名	初回・2回目の献血方法別にVVR発生頻度を比較	初回200ml献血→2回目400ml献血は初回400ml→2回目400ml献血よりVVR発生率が高く、初回200ml献血によって2回目400ml献血時のVVRは防げない。
	河原班(19年度)	18年度全献血ドナー	男性: 3,532,404名 女性: 2,560,404名	献血基準拡大に伴う見込み	17歳400ml導入により全血総献血者数の0.73%増加するが、上限を69歳から74歳に引き上げることで0.11%増加に留まる。血小板献血を59歳から59歳へ引き上げにより45,534名増加が見込まれる。
		全血献血ドナー	男性: 11,405名 女性: 7,321名	比重法からHb法変更に伴う見込み	女性で1.44%のドナー減少、男性Hb13.0g/dlとすると1.04%のドナー減少
③	Transfusion2002	高校生全血ドナー(平均17歳)	白人: 1,076名 アフリカ系: 226名	若年ドナーのVVR発生リスク(人種別、性別、回数、体重別)	VVR発生率は白人8.2% vs アフリカ系1.2%で白人においては初回、低体重者、女性が多い。
④	Transfusion2006	高校生全血ドナー(平均17歳)	白人: 7,274名	白人若年ドナーのVVR発生にリスク因子(性別、体重別、採血量別)	初回の17歳女性ドナーにおけるVVR発生率が高率である。
⑤	Transfusion2008	ドナーヘモビジランス	全血ドナー: 6,014,472名 血小板ドナー: 449,594名 赤血球ドナー: 228,183名	2003年ARCドナーヘモビジランスより副作用解析	いずれの方法においても若年層ドナーでのVVR発生率は高く、月次変動は若年層が占める割合に依存する。→対策について
⑥	AABB2008			若年献血者の副作用及び傷害を軽減する方策	若年齢、初回献血、低体重、低血液量、女性、白人がVVRと相関。これらの誘発因子を考慮し、副作用軽減に関する対策について検討。傷害リスクを最小にするための勧告及び若年層への教育と同意に関する取り組みについて提案している。
⑦	血液事業2006	埼玉BCにおける全献血ドナー	男性: 442,449名 女性: 280,319名	全ドナーのうち、VVRによる転倒をきたした16名の解析とその対策	3年間で16名(0.002%)。全血男性ドナーに多い傾向。10歳代と80歳代で同等に多い。水分摂取と30分休憩により10歳代の転倒者がゼロになった。
⑧	血液事業2006	埼玉BCにおける成分献血ドナー	成分ドナー: 76,658名	成分ドナーにおけるVVR発生率の要因解析	初回女性(特に60歳以上)の成分献血でVVR高い。初回成分献血の是非について

資料番号	出典	対象	症例数	目的	結果
⑨	Transfusion2008	豊橋BCにおける全献血ドナー	全血(男性:20,025名) (女性: 8,164名) 成分(男性:14,523名) (女性: 6,722名)	年齢、採血量、献血種類によるVVR発生率解析	女性(特に45歳以上、循環血液量少ない)の成分献血でVVR発生率高い。(初回・再来での検討はされていない。)
⑩	FDA			血小板自動採血に対する指針	採血ドナー基準、管理他についての指針
⑪	血液事業	香川BCにおける全血ドナー	200mlドナー:63名 400mlドナー:62名	比重法とHb法の比較 (相関性)	比重適格者のHb(400ml:12.6-17.3g/dl、200ml:12.1-16.4g/dl)と妥当
			比重法(男性:23,985名) (女性:21,715名) Hb法(男性:22,749名) (女性:20,504名)	比重法とHb法の比較 (不適格者率、VVR発生率)	両法の不適格率に差はない。VVR発生率はHb法において男性で発生率が減少したが女性では差がなかった。 →Hb法変更することによってVVR発生率は増加しなかった。
⑫	Transfusion2003	英国NBS	献血ドナー(男性:783名) (女性:730名)	比重法とHb法の比較 (相関性)	比重法は偽適格率が高い(特に女性)。 スクリーニング方法見直しが必要
⑬	自己血輸血学会 2003	心臓血管外科自己血ドナー	8日で800ml採血:188名 7日未満400ml採血:44名 9日以上800ml採血:28名	自己血採血の採血間隔とHb回復、無輸血率	貯血間隔8日及び9日以上で800ml貯血を行ったところ、1回目のHb値は13.0g/dl及び13.5g/dl、術直前Hb値は1た。0g/dl及び11.2g/dlと差異なく、無輸血率は81.7%及び92.9%であ
⑭	自己血輸血学会 2004	自己血ドナー	男性13名、女性34名	400ml採血2週間後のHb回復度への影響因子	採血前Hb値と貯蔵鉄量がHb回復度に影響する。
⑮	Transfusion2004	ベルリン大学における全血ドナー	男性289名、女性237名	鉄剤服用による採血回数	20mg/日の服用により献血回数を男性で6回、女性で4回へ上げることが可能であった。
⑯	血液事業			貧血と採血基準についての検討	鉄欠乏のない日本人男性のHb値下限は12.8~13.2g/dl、女性では11.8~12.1g/dlであり、採血基準を見直す必要がある。
⑰	ARC			16歳以下の保護者に対する同意書	
⑱	佐竹班(15年度)	全国のBCによる献血ドナー	約6,000,000名	献血者の副作用データ解析	全献血者の1%に副作用、73%がVVR(全ての副作用で女性に高率)。女性ではPC>PPP>400ml WB>、男性では採血種間差はない。200ml採血で性差ない。女性でのVVR頻度の増加分は対策により予防可能では? →循環血液量に比する採血率の過重が原因と推察。
⑲	血液事業2006	埼玉BCにおける献ドナー	全血(男性:198,712名) (女性:320,943名) 成分(男性:100,457名) (女性:168,295名)	VVR高頻度群への予防対策と効果	全血(初回若年層)、成分(再来中高年女性)に30分以上の休憩、水分摂取を促したところ、軽症のVVRは男女ともに低下したが、重症例では男性では低下しなかった。女性では血漿と400mlで有意に発生率が低下した。若年男性の重症例では他の方策を考える必要がある。

資料番号	出典	対象	症例数	目的	結果
⑩	輸血学会2006	アンケート調査	集団献血高校生:400名 非集団献血高校生:450名 両群の教師:200名 父母:400名	16-17歳400ml採血への介入検討	情報提供前:400ml全血献血に67%、成分献血に61%に賛同 →情報提供後:400ml全血献血に77%、成分献血に74%賛同。 若年献血には適切な情報提供が必要である。

第2回WG追加各種論文等

資料番号	出典	対象	症例数	目的	結果
①*	日本赤十字社	19年度(16歳から19歳)献血ドナー	16歳男性200ml:16,277名 16歳女性200ml:17,736名 17歳男性200ml:23,376名 17歳女性200ml:24,248名	19年度(16歳から19歳)献血ドナーにおける1歳刻みの副作用報告(被害救済者対象)	200ml献血において16~17歳の200ml全血でのVVR発生率は18から19歳よりむしろ低頻度であった。転倒率も同様もしくは若干低い傾向にあった。
②*	河原班プレゼン資料	17歳男性ドナー	男性:322名	17歳男性及び18-19歳男性における400ml採血による副作用、各種検査値改善度の比較検討	17歳男性における400ml全血採血は18-19歳の400ml全血と比してVVR発生率、Hb回復度に有意差はなく(むしろ低い傾向)安全に施行可能と考えられる。
③*	日本赤十字社	19年度全献血ドナー		年齢、性別、採血種類別採血副作用発生率	男性におけるVVR発生率は血漿採血と血小板採血の間でほぼ同様の傾向にあるが、女性では45歳以上血小板採血において血漿と乖離し、発生率が増加している。
④*	日本赤十字社	19年度複数回献血ドナー	男性11名	全血400ml複数回全血献血者のHb推移	4回献血者のHb推移では4回目の回復は落ちる傾向にある。
⑤*	厚生省血液研究事業 昭和59年度 研究報告書	複数回献血の安全性評価	男性307名 女性32名	3ヶ月間隔採血時のHb回復状況	男性では4回採血3ヶ月後の、女性では6ヶ月、9ヶ月後のHb値が初回前値と比較して有意に低下していた。
⑥*	日本赤十字社	全献血ドナー (平成16年10月~平成17年9月)		初回および再来献血者におけるVVR発生率(採血種類別、性別)及び副作用総件数とその分類	全ての採血種間において初回ドナーは再来ドナーと比較して有意にVVR発生率が高く、特に男性で顕著である。成分献血においてはVVR歴よりも初回者の方が発生率が高いが、全血では初回者よりもVVR歴者でリスクが高かった。
⑦*	WHO	Requirements for the collection, processing and quality control of blood, blood components and plasma derivatives(1994)		Requirements for the collection, processing and quality control of blood, blood components and plasma derivatives(1994)	献血ドナーは男女とも18歳から65歳までの健康者であること。ドナー年齢の上限を設けていない、また親の同意があれば下限を16歳まで下げている国もある。
⑧*	WHO	Standard operating procedure		Standard operating procedure	<p><採血条件></p> <ul style="list-style-type: none"> ・採血間隔は3ヶ月以上あける ・体重が45Kg以上あること ・Hbが12.5g/dl以上であること(他) <p><同意について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・血液の必要性 ・献血ボランティアの必要性 ・輸血を介する感染症について ・問診と正直な回答の必要性 ・安全な献血について ・献血血液の工程と使われ方について ・献血血液に行われる検査について

採血基準に関する各種論文

(第1回採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ提示分)

	項目	文献整理番号
1	400mL採血、成分献血の下限年齢の見直し	①、②、③、④、 ⑤、⑥
2	血小板成分採血の上限年齢	⑦、⑧、⑨、⑩
3	採血基準項目の「血液比重又は血色素量」を「血色素量」に改められないか	②、⑪、⑫
4	年間総採血量、採血回数、採血間隔	⑬、⑭、⑮
5	男性の血色素量最低値	⑯
6	インフォームドコンセント、ドナーの安全対策関連	⑤、⑥、⑩、⑰
7	その他(副作用全般)	①、④、⑥、⑦、 ⑧、⑨、⑱、⑲、 ⑳

19年度 年齢層別・男女別採血副作用発生件数

献血者年齢層／男女区分		VVR	VVR転倒	皮下出血	神経損傷	静脈炎	神経障害	穿刺部痛	その他	合計
16～19歳	男	5	15	8	1	0	2	0	7	38
	女	14	14	8	1	0	4	2	4	47
	小計	19	29	16	2	0	6	2	11	85
20～29歳	男	10	20	12	12	2	9	3	24	92
	女	33	20	13	16	2	8	6	19	117
	小計	43	40	25	28	4	17	9	43	209
30～39歳	男	12	16	11	31	4	15	9	23	121
	女	9	11	8	6	2	11	6	9	62
	小計	21	27	19	37	6	26	15	32	183
40～49歳	男	4	10	9	13	0	7	5	27	75
	女	8	7	4	7	1	5	2	7	41
	小計	12	17	13	20	1	12	7	34	116
50～59歳	男	7	5	7	6	0	4	3	10	42
	女	18	11	2	5	0	3	2	5	46
	小計	25	16	9	11	0	7	5	15	88
60～69歳	男	2	1	4	2	0	1	1	4	15
	女	5	5	2	2	0	0	0	2	16
	小計	7	6	6	4	0	1	1	6	31
年代別合計	男	40	67	51	65	6	38	21	95	383
	女	87	68	37	37	5	31	18	46	329
	合計	127	135	88	102	11	69	39	141	712

【参考】年齢層別・男女別献血者数

献血者年齢層／男女区分	献血者数(人)	
16～19歳	男	171,258
	女	147,601
	小計	318,859
20～29歳	男	654,236
	女	476,505
	小計	1,130,741
30～39歳	男	944,094
	女	425,746
	小計	1,369,840
40～49歳	男	816,948
	女	290,626
	小計	1,107,574
50～59歳	男	543,530
	女	227,345
	小計	770,875
60～69歳	男	168,722
	女	89,343
	小計	258,065
年代別合計	男	3,298,788
	女	1,657,166
	合計	4,955,954



年齢性別採血副作用(平成19年度)

河原班 血小板採血基準拡大(年齢延長)関連

採血副作用件数(副作用1-5)

採血種類・性別/年齢	16-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69	
200	男	745	223	155	94	68	46	23	17	8	4	2
	女	1,535	953	567	357	221	121	81	65	51	26	11
	男女	2,280	1,176	722	451	289	167	104	82	59	30	13
400	男	2,821	4,674	3,246	2,717	2,015	1,120	693	427	289	100	33
	女	1,514	2,206	1,183	1,005	719	468	353	312	382	190	52
	男女	4,335	6,880	4,429	3,722	2,734	1,588	1,046	739	671	290	85
PPP	男	97	274	245	251	235	186	157	124	272	158	100
	女	741	1,919	1,093	904	644	389	326	268	370	228	102
	男女	838	2,193	1,338	1,155	879	575	483	392	642	386	202
PC	男	207	817	633	860	826	632	538	405			
	女	571	1,573	1,084	955	792	570	497	424			
	男女	778	2,390	1,717	1,815	1,618	1,202	1,035	829	0	0	0

52,359

VVR件数(副作用1-5)

採血種類・性別/年齢	16-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69	
200mL	男	688	213	148	87	59	43	17	11	2	0	0
	女	1,294	821	485	285	165	80	50	32	19	9	1
	男女	1,982	1,034	633	372	224	123	67	43	21	9	1
400mL	男	2,680	4,399	3,008	2,441	1,760	921	537	286	177	45	12
	女	1,405	2,010	1,067	879	618	390	283	255	309	150	43
	男女	4,085	6,409	4,075	3,320	2,378	1,311	820	541	486	195	55
PPP	男	62	155	131	132	113	89	65	51	112	58	34
	女	521	1,280	759	571	394	238	222	186	271	155	79
	男女	583	1,435	890	703	507	327	287	237	383	213	113
PC+PPP	男	113	405	310	392	375	276	232	176			
	女	400	1,017	737	634	531	382	342	319			
	男女	513	1,422	1,047	1,026	906	658	574	495	0	0	0

40,503

VVR転倒件数(副作用1-5)

採血種類・性別/年齢	16-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69
200mL	男	10	1	1	2	0	0	0	0	0	0
	女	20	9	4	0	1	1	0	1	0	0
	男女	30	10	5	2	1	1	0	1	0	0
400mL	男	45	74	40	49	25	26	10	6	6	0
	女	38	55	16	12	20	12	6	9	14	10
	男女	83	129	56	61	45	38	16	15	20	10
PPP	男	0	0	3	4	1	1	2	0	0	1
	女	4	21	12	5	11	0	2	3	3	1
	男女	4	21	15	9	12	1	3	5	3	1
PC+PPP	男	2	6	2	9	6	4	3	3		
	女	5	22	17	11	7	7	6	3		
	男女	7	28	19	20	13	11	9	6	0	0

719

献血者数

採血種類・性別/年齢	16-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69	
200mL	男	47,867	6,879	5,884	6,611	7,680	7,399	7,812	8,165	8,907	4,739	2,580
	女	77,296	61,090	50,306	52,509	48,690	35,505	28,678	25,689	27,733	15,538	6,567
	男女	125,163	67,969	56,190	59,120	56,370	42,904	36,490	33,854	36,640	20,277	9,147
400mL	男	107,177	230,977	228,788	307,542	341,513	301,881	262,572	213,351	181,239	82,713	32,031
	女	43,836	89,385	71,250	81,221	86,687	71,062	61,444	59,681	62,845	34,442	12,937
	男女	151,013	320,362	300,038	388,763	428,200	372,943	324,016	273,032	244,084	117,155	44,968
PPP	男	5,177	24,801	32,797	40,804	43,698	36,816	32,135	23,749	51,376	26,987	19,672
	女	16,703	66,545	56,308	49,051	40,257	27,964	21,760	16,198	21,334	12,513	7,346
	男女	21,880	91,346	89,105	89,855	83,955	64,780	53,895	39,947	72,710	39,500	27,018
PC+PPP	男	11,037	55,822	68,288	93,108	103,138	89,328	79,005	56,743			
	女	9,766	44,475	37,146	35,268	32,063	24,410	19,803	13,865			
	男女	20,803	100,297	105,434	128,376	135,201	113,738	98,808	70,608	0	0	0

4,955,954

採血副作用発生率(副作用1-5)

採血種類・性別/年齢	16-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69	
200mL	男	1.56%	3.24%	2.63%	1.42%	0.89%	0.62%	0.29%	0.21%	0.09%	0.08%	0.08%
	女	1.99%	1.56%	1.13%	0.68%	0.45%	0.34%	0.28%	0.25%	0.18%	0.17%	0.17%
	男女	1.82%	1.73%	1.28%	0.76%	0.51%	0.39%	0.29%	0.24%	0.16%	0.15%	0.14%
400mL	男	2.63%	2.02%	1.42%	0.88%	0.59%	0.37%	0.26%	0.20%	0.16%	0.12%	0.10%
	女	3.45%	2.47%	1.66%	1.24%	0.83%	0.66%	0.57%	0.52%	0.61%	0.55%	0.40%
	男女	2.87%	2.15%	1.48%	0.96%	0.64%	0.43%	0.32%	0.27%	0.27%	0.25%	0.19%
PPP	男	1.87%	1.10%	0.75%	0.62%	0.54%	0.51%	0.49%	0.52%	0.53%	0.59%	0.51%
	女	4.44%	2.88%	1.94%	1.84%	1.60%	1.39%	1.50%	1.65%	1.73%	1.82%	1.39%
	男女	3.83%	2.40%	1.50%	1.29%	1.05%	0.89%	0.90%	0.98%	0.88%	0.98%	0.75%
PC+PPP	男	1.88%	1.46%	0.93%	0.92%	0.80%	0.71%	0.68%	0.71%			
	女	5.85%	3.54%	2.92%	2.71%	2.47%	2.34%	2.51%	3.06%			
	男女	3.74%	2.38%	1.63%	1.41%	1.20%	1.06%	1.05%	1.17%			

VVR発生率(副作用1-5)

採血種類・性別/年齢	16-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69	
200mL	男	1.44%	3.10%	2.52%	1.32%	0.77%	0.58%	0.22%	0.13%	0.02%	0.00%	0.00%
	女	1.67%	1.34%	0.96%	0.54%	0.34%	0.23%	0.17%	0.12%	0.07%	0.06%	0.02%
	男女	1.58%	1.52%	1.13%	0.63%	0.40%	0.29%	0.18%	0.13%	0.06%	0.04%	0.01%
400mL	男	2.50%	1.90%	1.31%	0.79%	0.52%	0.31%	0.20%	0.13%	0.10%	0.05%	0.04%
	女	3.21%	2.25%	1.50%	1.08%	0.71%	0.55%	0.46%	0.43%	0.49%	0.44%	0.33%
	男女	2.71%	2.00%	1.36%	0.85%	0.56%	0.35%	0.25%	0.20%	0.20%	0.17%	0.12%
PPP	男	1.20%	0.62%	0.40%	0.32%	0.26%	0.24%	0.20%	0.21%	0.22%	0.21%	0.17%
	女	3.12%	1.92%	1.35%	1.16%	0.98%	0.85%	1.02%	1.15%	1.27%	1.24%	1.08%
	男女	2.66%	1.57%	1.00%	0.78%	0.60%	0.50%	0.53%	0.59%	0.53%	0.54%	0.42%
PC+PPP	男	1.02%	0.73%	0.45%	0.42%	0.36%	0.31%	0.29%	0.31%			
	女	4.10%	2.29%	1.98%	1.80%	1.66%	1.56%	1.73%	2.30%			
	男女	2.47%	1.42%	0.99%	0.80%	0.67%	0.58%	0.58%	0.70%			

VVR転倒発生率

採血種類・性別/年齢	16-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60-64	65-69	
200mL	男	0.021%	0.015%	0.017%	0.030%	0.000%	0.000%	0.000%	0.000%	0.000%	0.000%	0.000%
	女	0.026%	0.015%	0.008%	0.000%	0.002%	0.003%	0.000%	0.004%	0.000%	0.000%	0.000%
	男女	0.024%	0.015%	0.009%	0.003%	0.002%	0.002%	0.000%	0.003%	0.000%	0.000%	0.000%
400mL	男	0.042%	0.032%	0.017%	0.016%	0.007%	0.009%	0.004%	0.003%	0.003%	0.000%	0.000%
	女	0.087%	0.062%	0.022%	0.015%	0.023%	0.017%	0.010%	0.015%	0.022%	0.029%	0.046%
	男女	0.055%	0.040%	0.019%	0.016%	0.011%	0.010%	0.005%	0.005%	0.008%	0.009%	0.013%
PPP	男	0.000%	0.000%	0.009%	0.010%	0.002%	0.003%	0.003%	0.008%	0.000%	0.000%	0.005%
	女	0.024%	0.032%	0.021%	0.010%	0.027%	0.000%	0.009%	0.019%	0.014%	0.008%	0.027%
	男女	0.018%	0.023%	0.017%	0.010%	0.014%	0.002%	0.006%	0.013%	0.004%	0.003%	0.011%
PC+PPP	男	0.018%	0.011%	0.003%	0.010%	0.006%	0.004%	0.004%	0.005%			
	女	0.051%	0.049%	0.046%	0.031%	0.022%	0.029%	0.030%	0.022%			
	男女	0.034%	0.028%	0.018%	0.016%	0.010%	0.010%	0.009%	0.008%			

平成18年度 厚生労働科学研究費補助金
(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)
総括研究報告書

献血者の安全確保対策に配慮した採血基準の拡大に関する研究

主任研究者 河原 和夫 (東京医科歯科大学大学院 政策科学分野 教授)

研究要旨

2002年に成立した「安全な血液の安定供給に関する法律」においても、血液製剤の安全性確保と国内自給によるその安定供給は同法の理念にもなっている。さらに同法の国会審議において、献血者に生じた健康被害の救済の在り方について検討することが附帯決議の中でも求められている。いわば献血者は病に苦しむ人を救うという人類普遍の善意に基づいて献血という行為を行っている訳だが、こうした献血者の善意で現代医療は支えられているが、献血者の安全性をさらに向上するとともに医療現場に安定して血液製剤を供給するためには、最近の状況を踏まえて、科学的観点から改めて採血基準を再検討する必要がある。

採血基準に関しては現在、献血者の健康面への配慮と受血者にヘモグロビン量の多い血液供給をめざす観点から、内部基準の設定や検討が一部の血液センターにて実施されている。ヘモグロビン簡易測定法への全国的な切り替えに際し、適切な採血基準または内部基準を統一することが検討課題となっている。そこで、血液比重による採血適否判定とヘモグロビン簡易測定値の比較を行い、統一的な基準策定のための調査を実施した。

約2万人のデータを得た結果から、従来からの血液比重による採血適否判定とヘモグロビン簡易測定値では、血液比重では採血可能との判定にあるもののヘモグロビン簡易測定値では、採血ができないほど低値にある採血者も確認された。逆に、血液比重は1.052未満であるにもかかわらずヘモグロビン簡易測定値では、採血が十分可能な高値の献血者が存在することも明らかとなった。

この両者の差異を解消できる採血基準の策定が今後必要になる。

一方、献血に伴う血管迷走神経反応 (VVR) 等の副作用は、献血者に健康被害を及ぼすなどの負の側面があり極力その防止に努めるべき課題である。

本研究ではさらに、若年者に多いと言われている献血時の副作用の一つである血管迷走神経反応 (VVR) に関して、現行採血基準における若年者の「初回献血の年齢別・献血方法別 VVR 反応発生状況」について調査するとともに、「初回献血は200ml 献血を行ない2回目に400ml 献血を行なった場合と、初回・2回目とも400ml 献血を行なった場合の両者における、2回目400ml 献血時の VVR 発生率」についての比較を行った。

また、待機的な手術に用いられる貯血式自己血では、その採血基準は一般献血の採血基準より厳格ではないことから自己血の採血時の有害事象を調査した。その結果、年齢、体重に関する献血基準の範囲外の症例で VVR を有意に発症しやすいということはなかったが、VVR 発症例で1回の採血量の循環血液量に対する割合は有意に高かった。採血基準の改定を検討する場合、採血量の循環血液量に対する割合を考慮すれば、現行の年齢、体重に関する規定を緩和できる可能性が示唆された。

少子高齢社会が急速に進展している今日、科学的根拠に基づく採血基準を設定するとともに、献血者の健康保護に十分配慮した血液事業の推進が求められている。

A. 目的

献血人口の減少は少子高齢社会の進展により急速に進行している。自国の血液製剤需要は国内自給により賄うことが WHO（世界保健機関）をはじめとする国際的な認識である。しかし、わが国ではこのように献血人口が減少している現実を踏まえ、採血基準を見直すことにより必要量を確保することも血液の需給バランスを考える際のひとつの手段である。

血液事業はこうした医療現場が混乱しないように必要な血液製剤を絶えず供給するという使命を有するとともに、こうした量的確保に加えて献血者や受血者の安全性を確保し、製剤の品質向上に関しても大きな使命がある。

近年、従来より用いられていた血液比重による貧血の判定に替えてヘモグロビン簡易測定法による貧血の判定へと切り替える血液センターが増えている。

そこで、従来の血液比重による判定方法とヘモグロビン簡易測定法による判定方法を比較することにより、適切な採血基準を設定し、献血者の健康面への配慮と受血者にヘモグロビン量の多い血液供給をめざすに当って、科学的な根拠を示すことが本研究の目的のひとつである。

次に、今後益々進行する少子高齢化社会における輸血用血液の安定確保を図るために若年者の献血推進、特に 400ml 全血採血の推進のために必要な献血時の副作用の発生状況を詳細に調査し、その予防対策を講じるための基礎資料とすることが本研究のもうひとつの目的である。実際の献血者データを分析するとともにその採血基準が、一般献血の採血基準より厳格ではない待機的な手術に用いられる貯血式自己血の採血時の有害事象を調査することにより、現行の献血採血基準の範囲外における採血者の安全性を検討した。

B. 方法

B-1. 血液比重による採血適否判定とヘモグロビン簡易測定値の比較

全血採血の適否判定を現行どおり血液比重法にて行うと同時に Hb 値簡易測定を実施し、採血基準のあり方についての検討資料とするために、全血献血（200ml、400ml）希望者を対象にして、埼玉、愛知、福岡、岡山の 4 血液センターにて平成 19 年 2 月上旬～3 月末日の期間に実施した。

そして、「①400ml 献血者の男女別 Hb 分布」、「②比重測定にて 1.052 以上 1.053 未満として 400→200ml 採血に変更した献血者の Hb 分布」、「③200ml 献血者の男女別 Hb 分布」、そして「④1.052 未満で不採血の場合の Hb 分布」について分析した。

B-2. 若年献血者の全血採血における VVR 反応の発生頻度について

1) 若年者の初回献血時 VVR 反応発生状況の調査では、全国 7 地域（北海道、宮城県、東京都、愛知県、大阪府、岡山県、福岡県）で平成 17 年 1 月～12 月に献血をした 16 歳～20 歳の献血者を対象とし、性別、年齢別、献血方法（200ml、400ml）、重症度別に VVR の発生率を調査した。2) 初回 200ml 献血を行なうことの VVR 軽減効果については、当該期間に上記 7 地域で 2 回目の献血を行なった 18 歳～20 歳の献血者の VVR 発生状況を初回献血時の方法別に解析した。

2) 平成 18 年に東京都立駒込病院で自己血を採血した患者 215 例を対象にレトロスペクティブに解析した。患者背景、年齢、性別、体重、一回採血量、循環血液量などを調査し、採血に伴う合併症の有無とその要因について解析した。

（倫理面への配慮）

本研究は、個人を特定することなく献血に伴う副作用情報を分析するとともに、献血者の貧血状況を測定するものであり、貧血検査については献血の際の同意事項であるため倫理上の問題は生じない。また、データの取り

扱いについては「疫学研究に関する倫理指針(文部科学省・厚生労働省平成17年6月29日)」を遵守している。

C. 結果

18,726名の献血者に対して血液比重による採血適否判定とヘモグロビン簡易測定値の比較を行った。そのうち有効数、18,705名(男性11,387名(60.9%)、女性7,318名(39.1%))について分析を行った。

年齢は、平均38.4歳(最年少16歳、最年長69歳)で、全体の血液比重値は平均値が1.05272、ヘモグロビン値が14.0であった。

希望する献血の種別については、200mL採血が3,107名(16.6%)、400mL採血が15,598名(83.4%)で、400mL採血を希望する献血者が多かった。しかし、実際の採血種類は、200mL採血が2,769名(14.8%)、400mL採血が13,562名(72.5%)、採血できなかった者が2,370名(12.7%)であった。

比重測定にて1.052以上1.053未満として400→200mL採血に変更した献血者のHb分布であるが、この情況に合致した献血者は398名であった。そのヘモグロビン値の平均値は、12.47g/dl(最小値10.2g/dl、最大値18.7g/dl)であった。

血液比重法の特長(血液比重測定法の感度、特異度、擬陽性率、擬陰性率など)を分析するために200mL採血と400mL採血に分け、前者は比重1.052が血液比重法による採血基準であることから、1.052以上と1.052未満に分けた。そして、もうひとつの採血基準であるHb値12g/dL以上の場合真の採血可能者、未満を真の採血不可能者とした。同様に400mL採血については、血液比重1.053とHb値12.5g/dLを基準数値に用いた。

そしてこれらを下記のように分類した。

200mL採血

	Hb値12g/dL以上	Hb値12g/dL未満	合計
血液比重1.052以上	真の採血可能者(a)	擬の採血可能者(b)	a+b
血液比重1.052未満	擬の採血不可能者(c)	真の採血不可能者(d)	c+d
合計	a+c	b+d	a+b+c+d

400mL採血

	Hb値12.5g/dL以上	Hb値12.5g/dL未満	合計
血液比重1.053以上	真の採血可能者(a)	擬の採血可能者(b)	a+b
血液比重1.053未満	擬の採血不可能者(c)	真の採血不可能者(d)	c+d
合計	a+c	b+d	a+b+c+d

その結果、以下ようになった。

200mL採血

	Hb値12g/dL以上	Hb値12g/dL未満	合計
血液比重1.052以上	2,595	137	2,732
血液比重1.052未満	37	0	37
合計	2,632	137	2,769

感度=2,595/2,632=0.986

特異度=0/137=0

擬陰性率=37/2,632=0.014

擬陽性率=137/137=1

陽性尤度比=真陽性率/擬陽性率=感度/(1-特異度)

=0.986/1=0.986

陰性尤度比=擬陰性率/真陰性率=(1-感度)/特異度

=0.014/0・・・計算不能

400mL 採血

	Hb 値 12.5g/dL 以上	Hb 値 12.5g/dL 未満	合計
血液比重 1.053 以上	13,126	370	13,496
血液比重 1.053 未満	1	65	66
合計	13,127	435	13,562

感度=13,126/13,127=0.9999

特異度=65/435=0.149

擬陰性率=1/13,127=0.00008

擬陽性率=370/435=0.851

陽性尤度比=真陽性率/擬陽性率=感度/(1-特異度)

=0.9999/0.851=1.1750

陰性尤度比=擬陰性率/真陰性率=(1-感度)/特異度

=0.0001/0.149=0.0007

献血者を対象としたデータが示すところは、若年者の血管迷走神経反応 (VVR) の発生状況やその態様については、1) 若年者の初回献血時の総 VVR 反応発生率は (軽症例+重症例)、男性 200ml 献血時で平均 1.86%、400ml 献血時で 3.75%であった。年齢別では、200ml における 18 歳、19 歳、20 歳の発生率が (各々 2.69%、2.37%、2.99%)、16 歳、17 歳 (1.45%、1.62%) と比較して高い傾向が認められたが、400ml においては年齢間の発生頻度に違いはなかった。うち、重症 VVR の発生率は 200ml で 0.07%、400ml で 0.17%であった (年齢間に有意差なし)。女性の総 VVR 発生率は 200ml で平均 2.16%、400ml で 4.34%であった。年齢別の発生頻度は、200ml では男性同様に 18 歳、19 歳、20 歳の発生率が (各々 2.23%、2.42%、2.76%)、16 歳、17 歳 (1.72%、1.92%) と比較し高い傾向が認められたが、400ml では年齢間の発生率に有意差は認めなかった。うち、重症 VVR の発生率は 200ml で 0.13%、400ml では 0.28%あり、年齢間の発生率に有意差は認めていない。2) 初回の献血方法別 (200ml、400ml 別) に、2 回目の 400ml 時の VVR 発生率を見たところ、初回が 200ml で 2 回目に 400ml の場合 (初回 200ml 群) の総 VVR の発生頻度は、平均 2.82%であり、初回献血から 400ml を行ない 2 回目も 400ml の場合 (初回 400ml 群) の VVR 発生率と比較して 1.42%と有意に高い結果であった。重症 VVR の発生率も初回 200ml 群が 0.23%と、初回 400ml 群の 0.07%と比較し、有意に高かった。

女性における総 VVR の頻度は、初回 200ml 群が平均 2.95% であるのに対し、初回 400ml 群で平均 2.40% と、初回が 400ml の方にやや低い傾向は認められたが、統計的有意差はなかった。重症 VVR の頻度は初回 200ml 群 (0.11%)、初回 400ml 群 (0.20%) であり、両者間に統計学的有意差はなかった。

自己血採血に関するデータであるが、対象者群の総採血回数は 404 回、男性 88 例、女性 126 例、年齢は平均 59.9 (19-87) 歳、体重は 58.3 (37.0-97.0) kg であった。基礎疾患は整形外科疾患の手術例が 42.3% と最も多く、次に脳外科手術例 31.2% であり、また、健常者である骨髄提供者が 11.6% を占めていた。

年齢分布は、70-79 歳が 55 例 (25.6%)、80 歳以上が 12 例 (5.6%) で、これらは一般の献血基準の範囲外の年齢で、計 67 例 (31.2%) を占めていた。

患者体重の分布と採血量については、献血の採血基準では 200ml 採血で、男性は 45kg 以上、女性は 40kg 以上、また、400ml 採血ではどちらも 50kg 以上が求められる。これらの基準を満たさない例は、男性で 3 例 (1.4%)、女性で 6 例 (2.8%)、全体では 9 例 (4.2%) 存在した。

1 回の採血量は 400ml がもっとも多く 42.3% を占め、採血回数は平均 1.9 回 (1-5 回) で、総貯血量は平均 579.3ml (200-1200ml) であった。1 回の採血量の患者循環血液量に対する割合は、平均 8.2% (3.7-9.4%) であった。

すべての症例のうち、採血時に有害事象が生じたのは 8 例 (9 回) であり、本年はすべてが血管迷走神経反射 (vasovagal reaction: VVR) であった。VVR 重症度はすべて I 度であった。1 例が 2 回 VVR を起していた。VVR 発生率は、実人数で男性 2.3%、女性 4.8%、延べ人数で男性 1.4%、女性 2.7% であった。いずれも女性に多い傾向があったが、統計学的な有意差は認めなかった。

VVR を発症した例と発症しない例の特徴を比較したところ、特に高齢者で VVR 発症例が多いということはない。体重、身長、循環血液量は VVR 発症例で低値をとる傾向にあったが、有意差は認めなかった。しかし、循環血液量に対する採血量の割合は VVR 発症例で有意に高かった。

D. 考察

血液比重法と Hb 測定法を比較したところ、200ml および 400ml 採血とも“血液比重検査の特異度”が低かった。つまり、擬陰性となる確率は低いものの、擬陽性となる確率が高い検査であると言える。

陽性尤度比が 200 および 400ml 採血とも 10 以下と極めて低いことから、血液比重検査は“貧血がないと考えられる献血者の”確定“には適していない。一方、陰性尤度比については、200ml は計算不能で 400ml は 0.1 以下であることから、400ml 採血に関しては、血液比重検査は“貧血であると疑われる献血者”の“除外”には有用であると考えられる。なお、400ml 献血の採血適否に用いられる血液比重法に限っては、全体として見れば検査精度が優れていると考えられる。

献血者の採血に伴う有害事象であるが、初回採血時の採血量と VVR の関係を指摘した報告もあることから、比較的不安が大きいと考えられる初回は 200ml 献血を、2 回目以降 400ml 献血を行なうことで VVR の発生率が軽減できるとも考えられる。しかし、今回の我々の結果では、男性では初回 200ml 献血、その後に 400ml 献血を実施した群の VVR の発生率は、初回から 400ml 献血をした群のより有意に高く、女性では両者間に有意差がなかった。

男性では 1 回目に 200ml をした献血者が 2 回目に 400ml 献血を行なう時に 1 回目より倍の量を採血される心理的不安が働いたことも一つの要因であろう。これに対し、女性では比較的、精神的影響が少なかったとも考えられる。しかし、これらは主として欧米からの報告であるため、人種差による心理的影響の違いについても今後検討して行く必要がある。さらにこれらの要因を加え、若年者の VVR 発生率を更に明確にする必要があると考えられる。

自己血採血については、年齢が採血基準の範囲外であっても VVR の発生率が高いということは認められなかった。

また、体重が採血基準の範囲外においても、VVR の発生率が高いということも認められなかった。ただし、循環血液量に対する採血量の割合は VVR 発症例で有意に高かったので、採血基準の改定を検討する際には循環血液量に対する採血量の割合を考慮する必要があるだろう。

循環血液量は体重と身長により推計できるが、現行の採血基準は体重のみの規定がある。体重も循環血液量を反映するが、体重があっても身長が低い場合は循環血液量が少ないので、両者を加味して一回採血量を決めることが望ましい。すなわち、循環血液量を考慮すれば、現行の採血基準における年齢、体重に関する規定を緩和できる可能性があるだろう。

一方、今回の調査結果は低循環血液量が VVR の発症の原因となっている可能性を示したものと思われる。したがって、循環血液量に対する採血量の割合が高い場合は、補液や経口摂取などで水分を補給することの意義があらためて確認されたものと思われる。

E. まとめ

ヘモグロビン (Hb) 簡易測定装置導入に伴い、献血者の健康面への配慮と、受血者に Hb 量の多い血液供給をめざす観点から、内部基準の設定や検討が一部の血液センターにて実施されている。Hb 簡易測定法への全国的な切り替えに際し、適切な採血基準または内部基準の統一については、①現行基準値は健常男性の Hb 値と比較して低いため基準値引き上げの是非、②200mL 採血基準を 400mL と同一基準に引き上げることの是非、③Hb 値の上限值の設定などが検討課題となっている。

このような背景のもと本研究を実施したが、血液比重法では比重に関する採血基準に適合していても実際に Hb 値が低く Hb 値からすれば採血基準を満たさない少数の献血者からも採血していたことが明らかとなった。

献血者の健康保護を考えると、血液比重法に代えて Hb 測定法を導入する必要がある。そして今回の研究結果をもとに、現行の採血基準値の見直しや受血者に Hb が多い血液製剤を供給するための方策などを検討していく必要がある。

一方、採血時の有害事象であるが、若年者が初回に 400ml 献血をした場合の総 VVR 発生頻率は概ね 3~4% であり、年齢、性別による差は少なかった。しかし、一般献血者の VVR 発生率が 1% 程度であることを考えると、ハイリスクの献血者と考えての慎重な対応が求められることが再確認された。

今回の研究結果により、少なくとも若年者に初回献血では 200ml 献血を行い、2 回目以降に 400ml 採血を行なうことは、VVR の発生率の軽減には繋がらないとの結果は得られたが、若年者の献血推進、特に 400ml 全血採血の推進を行なうには VVR の発生頻度は一般献血者の数倍であることを念頭に入れ、その検診、採血から接遇に至るまで細心の注意を払うべきと考える。

また、自己血採血時の有害事象は、現行の採血基準の範囲外の 70 歳以上の症例が 31.2% 含まれていたが、特に VVR の発生率が高いということとはなかった。また、現行の採血基準の範囲外の低体重者が 4.2% 含まれていた。低体重の原因だけでは VVR の発生率が高いことはなかったが、VVR 発症例では循環血液量に対する採血量の割合が有意に高かった。

以上のことより、献血者の適格人口の増加を期待し、採血基準を見直す場合、循環血液量に対する採血量のことを考慮すれば、年齢は 70 歳以上でも十分、安全性は確保できる可能性がある。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

予定あり

2. 学会発表

予定あり

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得

特になし

2. 実用新案登録

特になし

3. その他

特になし

平成19年度 厚生労働科学研究費補助金
(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)
総括研究報告書

献血者の安全確保対策に配慮した採血基準の拡大に関する研究

主任研究者 河原 和夫 (東京医科歯科大学大学院 政策科学分野 教授)

研究要旨

本研究班では献血年齢基準の見直しの観点から、1) 17歳への400ml全血採血の導入、2) 全血献血の上限年齢(現行69歳)の見直し、3) 血小板成分献血の上限年齢(現行54歳)の見直しの可能性について導入効果(献血者の増加率)と安全上の問題を平成18年度の全国献血者のデータの基づき検討した。加えて「血小板の上限年齢の見直しに関するアンケート調査」を50~54歳の血小板献血者を対象として実施した。

平成18年度に献血の受付をした男性3,532,404名、女性2,560,404名の計6,092,808名を対象として日本赤十字社の全国統一コンピューターシステムに入力されているデータを基に性別、献血方法別、年齢階層別に献血者数、献血不適格者数、副作用発生状況を集計し、その結果を解析の基礎データとした。血小板献血の上限年齢の見直しに関するアンケート調査は全国の7地域の血液センターで実施し、1,130名(男性739名、女性391名)からの回答が得られた。

その結果、1) 17歳に400ml全血献血を導入することでは、年間に200ml献血換算46,684名分(男性28,961名、女性17,723名)に相当する増加が見込まれ、これは平成18年度の全血総献血者数(200ml換算)の0.73%(男性0.45%、女性0.28%)に相当した。献血時の副作用の発生率は17歳では男女とも18・19歳を比較しても同等以下であった。2) 全血献血の上限年齢を69歳から74歳に延長した場合に増加する献血者数は年間に200ml換算で6,573名であり、全血総献血者数の0.11%程度の増加しか見込まれないことがわかった。現行採血基準では最も高齢の60代献血者の副作用発生率を、他の年代と比較したが、同等以下の発生率であった。しかし、Hb値が基準値未満のため(Hb不足)献血不適格となった人数は男性60歳代が他の年代と比較して高いことがわかった。3) 血小板成分献血の上限年齢を現行の54歳から59歳に延長した場合には、年間45,534名の献血者の増加が見込まれた。50代の血小板献血者の副作用発生率は他の年代と比較しても発生率は同等以下の値であったが、Hb不足による献血不適格者数は男性で50代から高くなる傾向が認められた。「血小板献血の上限年齢の見直しに関するアンケート調査」の結果では、90%以上の献血者が54歳以降も継続して血小板献血に協力したいと回答し、血小板献血の上限年齢の見直しを行なうことには85%以上から賛成との回答が得られた。

このように年齢基準の見直しで比較的多数の献血者増が見込まれ、アンケート調査でも肯定的な回答が得られている血小板成分献血の上限年齢の見直しを第一優先のテーマとして検討を進めるべきとの結論が得られた。

また、Hb基準値を引き上げた場合の献血者数への影響について血液比重による適否判定とHb簡易測定値をもとに検討した。

ヘモグロビン(Hb)簡易測定装置導入に伴い、献血者の健康面への配慮と、受血者にHb量の多い血液供給をめざす観点から、内部基準の設定や検討が一部の血液センターにて実施されている。Hb簡易測定法への全

国的な切り替えに際し、適切な採血基準または内部基準の統一について、特に「現行基準値は健常男性の Hb 値と比較して低いため基準値引き上げの是非と値」、「200mL 採血基準を 400mL と同一基準に引き上げることの是非」、「Hb 上限値の設定」が検討課題となっている。

血液比重測定法で採血適否判定を行い、同時に Hb 簡易測定も実施して、採血基準 Hb 値を引き上げた場合の採血数への影響を検討する。適切な採血基準として、参考資料（内田立身：貧血と採血基準を考える～血液学的立場から～。赤十字シンポジウム 2007）をもとに、200・400mL 同一基準で男性 Hb \geq 13.0、女性 \geq 12.5g/dL を仮定し算出した。

平成 19 年 2 月中旬～3 月下旬、血液センター（福岡ブロック、岡山ブロック、埼玉、愛知）で全血献血（200 mL,400mL）希望者を対象とし、血液比重法にて採血適否判定を行い、同時に Hb 値簡易測定をヘモキュー Hb201 プラスとその専用資材を用いて測定した。有効集計件数、男性 11,405 人、女性 7,321 人、計 18,726 人について解析を行った。なお Hb 簡易検査値は、当該検体の検査課機器測定値と大きく異なり、問診票と照合した結果 OCR 誤判読と判明したので、その点については訂正して解析した。また比重関連解析は、Hb 簡易検査判定をすでに導入している比重同時測定を実施した岡山ブロックの一部のデータ（山口 BC 分）を除外し、総計 17,429 件を解析した。

その結果、比重測定 1.052 以上 1.053 未満を示し、400mL から 200mL に変更した献血者の簡易 Hb 平均値と標準偏差値は、男性 12.6 ± 0.8 g/dL、女性 12.4 ± 0.6 g/dL で、現行の 200mL 採血基準の Hb12 g/dL 以上とほぼ合致する範囲であった。簡易測定 Hb 値と検査課測定 Hb 値であるが、愛知 C では、検査課での血球計算測定は XE-2100 を使用し、4℃保存で採血翌日（約 24～32 時間後）に測定している。簡易測定法と同時に測定したものではないため、検査課測定値は参考データにとどまるが、同一検体の簡易測定 Hb 値と検査課機器 Hb 値の平均、相関係数を算定した。簡易 Hb 値は検査課機器と比較して、平均値で男性 0.4、女性 0.3 g/dL それぞれ低い値を示していた。相関係数は、男性は 0.923 と「非常に強い相関」を示したが、女性では 0.877 と「やや強い相関」の結果であった。献血申込者の簡易 Hb 値の平均と標準偏差値は、男性 14.9 ± 1.1 g/dL、女性 12.7 ± 1.1 g/dL であった。男性で 13.0 g/dL 未満は 3.6%、女性で Hb12.5g/dL 未満は 37.9%であった。血液比重判定による男性献血者の簡易 Hb 値分布は、男性の 200mL 献血者数は 582 人（5.3%）で、10 代の占める比率が高い。400mL 献血は採血基準により、男女ともに比重測定法で 1.053（Hb 測定法で 12.5g/dL）以上と定められている。400mL 男性献血者では、Hb 簡易測定値で 13.0g/dL 未満は 241 人、逆に比重測定法で 1.053 未満と判定し Hb13.0g/dL 以上は 139 人存在した。Hb 簡易検査法に切り替え、判定基準値を 13.0g/dL 以上に設定すると、1.04%の減少が予測された。血液比重判定による女性献血者の簡易 Hb 値分布は、女性 200、400mL 献血者の Hb 値分布と年代別比率は、400mL 女性献血者では、比重測定にて 1.053 以上で、Hb 簡易測定値 12.5 g/dL 未満は 10.2%（310 人）含まれていた。逆に比重測定では 1.053 未満で、Hb12.5g/dL 以上を示した 400mL 献血希望者は 269 人であった。Hb 簡易測定法に切り替え、判定基準値（Hb12.5g/dL 以上）現行継続とした場合、41 人（1.44%）の減少が予測された。男性 \geq 13.0、女性 \geq 12.5g/dL 設定時の年代別採血不適率は、男性 400mL 献血希望者では Hb \geq 13.0g/dL とした場合、年代とともに不適率が上昇し、50 代（6%）、60 代（11.2%）で高く、全体では 3.5%が不適となった。200・400mL 同一判定基準を設定すると、200mL 希望男性の 6.7%が不適となった。女性に対し、200・400mL 同一判定基準（Hb \geq 12.5g/dL）を設定すると、10 代～40 代の不適率が高く、女性全体として 400mL 希望者で 35%、200mL 希望者で 42.6%が不適となった。献血申込者の簡易 Hb 値最高値は男性 20.0 g/dL、女性 18.7 g/dL であった。Hb 上限値の設定について、臨床的に精査が必要とされる数値を参考として男性 19 g/dL 以上、女性 17 g/dL 以上を設定した場合、不適率は男女ともに 0.08%であった。総蛋白量については、今回の検討対象者では、血中蛋白量が血液比重に

よる適否判定に影響したと考えられる例は認めなかった。

検討結果から、血液比重測定法と簡易 Hb 測定法はともに、手技を正しく行えば採血基準に従った適否判定に有用な手法と言える。H17 年に実施された簡易 Hb 測定機器評価試験で、検査課自動血球計数装置の測定値と比較して平均値がやや低いことが確認されている。今回の検討は、同一検体を 24~32 時間後に検査課機器^{***}で測定した Hb 値であるが、簡易 Hb 値は平均値で男性 0.4、女性 0.3 g/dL それぞれ低い値を示していた。簡易 Hb 測定機器の誤差は ± 0.3 g/dL とされており、採血基準を下回る献血者からの採血が防止できる設定である。

Hb 測定法への切り替えに伴い、現行基準値は健常男性の Hb 値と比較して低いことから、基準値を 12.5 から 13.0 g/dL に引き上げた場合の採血予測を行ったところ、比重測定値 1.053 以上の判定時に比べ 1.04% の減少が予測された。女性では Hb を現行基準と同じ 12.5 g/dL と設定し、比重測定による判定と比較すると 1.44% の減少が予測された。女性において、簡易 Hb 測定機器導入で献血者予測が減少する理由として、測定機器が本来の Hb 値よりやや低めに表示するよう設定されていることも影響していると思われる。

200mL 採血数は減少傾向 (H18 年 : 200mL 26%、400mL 74%) にある。受血者にとり供血者数は少ないほうが望ましく、200mL 採血は小児の輸血用に限定して採血している施設もある。200mL の採血基準を 400mL と同一基準に引きあげた場合、200mL 採血比率の低い九州地区ではほとんど影響がないと思われる。しかし、400mL 確保に苦慮している地域では、冬季の献血者減少時期など採血計画の変更が必要となる可能性がある。Hb 基準値の引き上げについては、今後予期しない感染症の流行や、供血者選択に新たな制限が加わる事態発生時などの血液確保も考慮して、検討されるべきであろう。

血液比重測定法は、基準値を満たすかどうか限定した判定であるが、簡易 Hb 測定法では基準をはずれた献血申し込み者に対し、個々の状態に応じた健康指導が可能となる。Hb 簡易測定機器導入後は、この利点を生かした健康指導体制も望まれる。

また、本研究では献血に関する医学生の意識調査を行い、医学生の献血の現状、将来の予測、献血行動の関連因子を明らかにし、医学生に献血のプロモーションを行うことが献血者確保に有効か否かを予測した。2008 年 1 月 8 日から 2 月 1 日にかけて、東京医科歯科大学医学部医学科生を対象とした調査票調査を行い、299 名 (全学生の 59%) から回答を得た。105 名 (35%) が献血経験者であり、45 名 (15%) がこの 1 年間に献血をしていた。今後 1 年以内に絶対献血すると回答したのは 31 名 (11%) であった。今後献血する意志と関連する因子は献血経験の有無によって異なり、経験者では献血の継続性が、未経験者では義務感や後悔の念などが献血意志と関連するという結果となった。本学医学生の献血経験者率は低いが、献血率は高い。献血率の高さは、大学祭での献血バスによって初回献血者を常に確保していること、献血経験者が継続的に献血を行っていることによって維持されていると考えられる。献血未経験者の献血意志は TRA や TPB で説明可能であるが、経験者では「献血を継続しており、前回の献血で悪い印象がなく、特に阻害要因がないこと」が献血意志を高く保つ条件だと考えられる。医学生の献血に協力する気持ちは高く、プロモーション効果は十分にある。その際、未経験者では TRA や TPB に沿った戦略、経験者では毎回の献血で嫌なイメージを持たせないことに重点を置いた戦略を採る必要がある。また、献血バスの初回献血者確保に対する有効性も考慮すべきである。

注 : BC ; Blood Center

C ; Center

TRA ; Theory of Reasoned Action

TPB ; Theory of Planned Behavior

A. 目的

少子高齢化社会の到来において献血可能人口の減少と高齢化による疾患構造の変化などにより血液需要量の増加が予測されるため、近い将来において血液の供給不足が懸念されるが、その対応策の一つとして献血年齢基準の見直しが考えられる。

そこで、本研究班では献血基準見直しの可能性が可能と考えられた3案、1) 17歳への400ml全血採血の導入、2) 全血献血の上限年齢(現行69歳)の見直し、3) 血小板成分献血の上限年齢(現行54歳)の見直しについて、導入効果(献血者の増加率)と安全上の問題の有無を平成18年度の全国献血者のデータの解析結果に基づき推定してみた。あわせて項目3)については、現行採血基準で血小板成分献血を行なっている50~54歳献血者を対象として、「血小板献血の上限年齢の見直しに関するアンケート調査」を実施し、採血基準の見直しのための基礎資料を提供することが主たる目的である。

また、Hb基準値を引き上げた場合の献血者数への影響を知るために、血液比重による適否判定とHb簡易測定値の比較検討を行い、Hb簡易測定法への全国的な切り替えに際し適切な採血基準または内部基準の統一のためのデータを収集し、「現行基準値は健常男性のHb値と比較して低いため基準値引き上げの是非と値」、「200mL採血基準を400mLと同一基準に引き上げることの是非」、「Hb上限値の設定」などの妥当性を検討することがもう一つの研究目的である。

さらに医学生集団に対して集中的にプロモーションを行うことで献血者増加につながるかどうかを考察することを目的として研究を実施した。

B. 方法

B-1. 献血者の年齢基準見直しに関する基礎的検討

平成18年度(平成18年4月~19年3月)に全国赤十字血液センター献血の受付をし、日赤全国統一コンピューターシステムに入力された男性3,532,404名、女性2,560,404名の計6,092,808名を対象として性別・献血方法別・年齢階層別に献血者数(実人数・延べ人数)、献血不適格者数、副作用発生状況について集計し、以後の解析の基礎資料とした。(献血者数は、男性3,212,704名、女性1,777,305名の計4,983,009名)併せて、全国7地域の血液センター(北海道、宮城県、東京都、愛知県、大阪府、岡山県、福岡県)で50歳~54歳血小板成分献血者を対象とした血小板献血の上限年齢の見直しに関する意識調査を実施した。調査数は各施設200例(男性100例、女性100例)を目標とした。

B-2. 血液比重による採血適否判定とHb簡易測定値との関係について

平成19年2月中旬~3月下旬、血液センター(福岡ブロック、岡山ブロック、埼玉、愛知)で全血献血(200mL,400mL)希望者を対象とし、血液比重法にて採血適否判定を行い、同時にHb値簡易測定をヘモキューHb201プラスとその専用資材を用いて測定した。有効集計件数、男性11,405人、女性7,321人、計18,726人について解析を行った。なお、上記の有効集計件数のうち当該検体の検査課機器測定値と大きく異なり、問診票と照合した結果OCR誤判読と判明したものを除外した17,429件を解析対象とした。

B-3. 医学生の献血に対する意識調査

東京医科歯科大学医学部医学科1~6年生を対象に、授業間の休憩時間に調査票を配布する方法により、自記式調査票調査を行った。調査期間は、平成20年1月8日~2月1日で調査票の内容は、年齢、性別、学年、献

血行動 (献血回数、献血場所、最近1年間の献血回数など)、献血に対する態度・イメージなど29項目である。
解析はSPSS 12.0J for Windows を用いて行い、有意水準は0.05とした。

(倫理面への配慮)

本研究は、個人を特定することなく献血に伴う副作用情報を分析するとともに、献血者の貧血状況を測定するものであり、貧血検査については献血の際の同意事項であるため倫理上の問題は生じない。また、データの取り扱いについては「疫学研究に関する倫理指針(文部科学省・厚生労働省平成17年6月29日)」を遵守している。

C. 結果

C-1. 献血者の年齢基準見直しに関する基礎的検討

17歳献血者への400ml全血採血の導入した場合の全血献血者の採血不適格者は、17歳男性の献血受付者数34,816名中、献血不適格者数は5,050名(14.5%)であり、17歳女性も献血受付者数53,188名中、献血不適格者数は20,728名(39.0%)と他の年代と比較して高い傾向が認められた。項目別に見ても、Hb不足(Hb値が基準値未満)、血圧、服薬、問診項目1(献血の永久不適項目に該当)、問診項目2(今回の献血は不可と判断される項目に該当)、事前検査、その他の全ての項目での不適格者数が他の年代と比較して高かった。

200ml全血献血者の年齢階層別副作用発生状況では、17歳男性の副作用発生率は1.19%であり、18~29歳の2.39%と比較して低い値であった。(18歳男性の副作用発生率は1.95%、19歳男性の副作用発生率は1.75%であり、18~29歳の1.37%と比較すると高かったが、18歳、19歳の1.75%、1.81%との比較ではほぼ同等の値であった。

17歳に400ml全血献血を導入した場合の献血人数(量)の増加の見込みであるが、平成18年度に200ml全血献血者を行なった17歳献血者のうち、どの程度が400ml全血献血の基準(体重、Hb値)を満たすかを調べた。17歳男性では29,765名中、400ml全血の献血基準(体重50Kg以上、Hb量12.5g/dl以上)を満たすのは28,961名(97.3%)であり、17歳女性では32,460名中、17,723名(54.6%)が体重・Hb量の両方の基準を満たすと推定された。

上記の献血者が全て400ml献血を行った場合には、年間に200ml献血換算で46,684名分(男性28,961名、女性17,723名)の献血量の増が見込まれるが、これは平成18年度の全血(200ml)換算総献血量6,378,490名の0.73%(男性0.45%、女性0.28%)に相当した。

全血献血の上限年齢の見直しについては全血献血の献血不適格状況を見ると、男性におけるHb不足の比率は50代が0.19%、60~64歳は0.42%、65~69歳は0.69%と年齢が増すとともに上昇する傾向があり、特に68歳・69歳のHb不足の率は0.93%、1.25%と高い値を示している。他の不適格項目の率は50代、60代で特に高い傾向はなかった。また、女性の50代、60代献血者の献血不適格者数は他の年代と比較して同等以下であった。200ml献血時の副作用発生状況、及び400ml献血時の副作用発生状況を見ると、男性では50代、60代献血者の発生率は他の年代と比較して低く、女性でも同様に50代、60代献血者の副作用発生率は他の年代と比較して低かった。

全血の献血者数、献血率とも60歳から減少傾向を示している。そこで献血率と(男女計)と年齢についての回帰直線を求めたところ、200ml献血では、 $Y = -0.04X + 2.93$ ($R^2 = 0.96$)、400ml献血では、 $Y = -0.15X + 10.61$ ($R^2 = 0.97$) の式で表される負の相関関係が認められた。この回帰直線を用いて、全血献血の年齢基準の上限を74歳まで引き上げた場合の献血率についてシミュレーションを行なった。200ml献血では70歳で0.13%の献血率が73歳までに0.01%まで減少し、400ml献血では70歳は0.10%であるが

71歳で0.01%まで減少すると予測された。

血小板成分献血の上限年齢の見直しについては、成分献血の受付者における献血不適格者状況を見ると、男性ではHb不足の率は、50～54歳で0.84%、54～59歳で1.12%、60～64歳で1.59%、64～69歳で1.69%と年齢を増すごとに不適格の率も増加する傾向が認められたが、女性では50代・60代のHb不足の率は他の年代と比較して高くはなかった。

血小板成分献血（PC）を行なっている献血者の副作用の発生率は50～54歳の副作用発生率は男女とも他の年代と比較して同等以下であった。また、血漿成分献血（PPP）を行なっている献血者の副作用発生率を見ても男女とも50～69歳の副作用発生率は他の年代と比較して同等以下であった。

血小板成分献血の上限年齢を現行の54歳から59歳迄延長した場合に献血者がどの程度増加するかをシミュレーションしてみた。年齢階層別の血小板成分献血者数は男女とも年齢を増すごとに献血者数が減少する傾向が認められている。45歳から54歳の間で、血小板献血者数（男女計の延べ人数）と年齢の関係について見てみると、 $Y = -992.69X + 65090.20$ ($R^2 = 0.98$) で示す負の相関関係が認められた。

この回帰直線を用いて、血小板献血の上限年齢を現行の54歳から59歳まで引き上げた時に増加する献血者数を推定してみると、年間に45,534名の献血者の増加が見込まれ、これは18年度の総血小板成分献血者数775,148名の5.49%に相当人数であった。

また、全国7地域の血液センターで、現在血小板成分献血に協力をしている50歳～54歳の献血者を対象として血小板献血の上限年齢の見直しに関するアンケート調査を行なった。施設別の調査例数は北海道188名、宮城県73名、東京都182名、愛知県123名、大阪府219名、岡山県177名、福岡県158名であり、合計は1130名であった（男性739名、女性391名）。年齢分布は50歳260名、51歳197名、52歳205名、53歳231名、54歳237名であった。

満54歳を越えてからの血小板献血については、男性で682名（92.3%）、女性で358名（91.6%）から今後も協力したいとの回答があった。血小板献血の上限年齢は54歳迄です。献血年齢の上限を引き上げについては、男性で661名（89.4%）、女性で337名（86.2%）から賛成の回答が得られたが、わからないとの回答も男性で68名（9.2%）、女性で47名（12.0%）あった。さらに賛成の場合、何歳までが適切と考えるかについては、男性では65歳未満との回答が225名（30.5%）最も多く、次いで60歳未満が207名（28.0%）であり、上限なしの回答は113名（15.3%）あった。女性では60歳未満との回答が153名（39.2%）と最も多く、次いで65歳未満が74名（18.9%）、上限なし41名（10.5%）の順であった。献血基準の見直しに関する意見は、「年齢に関係なく健康ならば献血可能」、「個人差があるので一律の年齢基準の設定は難しい」などの意見が多かった。献血基準の見直しに反対の意見は、3件あり、2件では（女性）血小板献血を行なった際に調子が悪くなったことを理由としていた。

C-2. 血液比重による採血適否判定とHb簡易測定値との関係について

比重測定1.052以上1.053未満を示し、400mLから200mLに変更した献血者の簡易Hb平均値と標準偏差値は、男性 12.6 ± 0.8 g/dL、女性 12.4 ± 0.6 g/dLで、現行の200mL採血基準のHb12 g/dL以上とほぼ合致する範囲であった。

簡易測定Hb値と検査課測定Hb値との関係については、愛知Cでは、検査課での血球計算測定はXE-2100を使用し、4℃保存で採血翌日（約24～32時間後）に測定している。簡易測定法と同時に測定したものではないため、検査課測定値は参考データにとどまるが、簡易Hb値は検査課機器と比較して、平均値で男性0.4、女性0.3 g/dLそれぞれ低い値を示していた。相関係数は、男性は0.923と「非常に強い相関」を示したが、女性で

は0.877と「やや強い相関」の結果であった。

献血申込者の簡易 Hb 値分布は、平均と標準偏差値は、男性 14.9±1.1g/dL、女性 12.7±1.1 g/dLであった。男性で 13.0 g/dL 未満は 3.6%、女性で Hb12.5g/dL 未満は 37.9%であった。

血液比重判定による男性献血者の簡易 Hb 値分布を求めたが、男性の 200mL 献血者数は 582 人 (5.3%) で、10 代の占める比率が高い。400mL 献血は採血基準により、男女ともに比重測定法で 1.053 (Hb 測定法で 12.5g/dL) 以上と定められている。400mL 男性献血者では、Hb 簡易測定値で 13.0g/dL 未満は 241 人、逆に比重測定法で 1.053 未満と判定し Hb13.0g/dL 以上は 139 人存在した。Hb 簡易検査法に切り替え、判定基準値を 13.0g/dL 以上に設定すると、1.04%の減少が予測された。一方、血液比重判定による女性献血者の簡易 Hb 値分布であるが、400mL 女性献血者では、比重測定にて 1.053 以上で、Hb 簡易測定値 12.5 g/dL 未満は 10.2% (310 人) 含まれていた。逆に比重測定では 1.053 未満で、Hb12.5g/dL 以上を示した 400mL 献血希望者は 269 人であった。Hb 簡易測定法に切り替え、判定基準値 (Hb12.5g/dL 以上) 現行継続とした場合、41 人 (1.44%) の減少が予測された。

男性 \geq 13.0、女性 \geq 12.5g/dL 設定時の年代別採血不適率は、男性 400mL 献血希望者では Hb \geq 13.0g/dL とした場合、年代とともに不適率が上昇し、50 代 (6%)、60 代 (11.2%) で高く、全体では 3.5%が不適となった。200・400mL 同一判定基準を設定すると、200mL 希望男性の 6.7%が不適となった。女性に対し、200・400mL 同一判定基準 (Hb \geq 12.5g/dL) を設定すると、10 代~40 代の不適率が高く、女性全体として 400mL 希望者で 35%、200 mL 希望者で 42.6%が不適となった。

献血申込者の簡易 Hb 値最高値は男性 20.0 g/dL、女性 18.7 g/dL であった。Hb 上限値の設定について、臨床的に精査が必要とされる数値*を参考として男性 19 g/dL 以上、女性 17 g/dL 以上を設定した場合、不適率は男女ともに 0.08%であった。

総蛋白量については、今回の検討対象者では、血中蛋白量が血液比重による適否判定に影響したと考えられる例は認めなかった。

C-3. 医学生への献血に対する意識調査

299 名から回答を得た。内訳は 1・2 年 96 名 (男 72 名、女 24 名)、3・4 年 113 名 (男 65 名、女 48 名)、5・6 年 90 名 (男 59 名、女 30 名、不明 1 名) であった。

現在までの献血回数が 1 回以上であると回答したものは 105 名 (35%、n=299) であった。また、最近 1 年間に 1 回以上献血したと回答したものは 45 名 (15%、n=296) であった。

将来の献血状況予測であるが、今後献血に協力する意向については、1 年以内に絶対献血すると回答したものが 31 名 (11%、n=289) であった。

回帰分析によって献血経験者ならびに未経験者の献血行動に関連する要因のモデルを作成したところ、経験者では「ここ 1 年間で何回献血しましたか」、「献血を続けることを止めようと考えたことがありますか」、「仮に献血する気持ちになった場合、確実に実行できると思いますか」の 3 項目、未経験者では「あなたにとって、献血は義務の 1 つですか」、「呼びかけられても献血しなかったとき、そのことを後悔することが多いですか」、「仮に献血する気持ちになった場合、確実に実行できると思いますか」、「問 27. 近年、献血者数は増加していると思いますか、減少していると思いますか」の 4 項目で「今後献血に協力する気持ちはありますか」との間に有意に相関が見られた。

D. 考察

若年者の献血基準であるが、欧米ではGoldmanらの報告によると16歳または17歳が下限と見受けられる。そこで、現在は200ml全血献血に限定されている17歳に400ml全血採血の導入をした場合に見込まれる増加率を調べたところ、全血総献血人数の0.75%（男性0.45%、女性0.28%）に相当する増加が見込まれている。なお、0.75%の増加は、平成18年度17歳の献血率4.7%に基づき試算したものであり、17歳の献血率が平成18年度の18・19歳の献血率の9.2%、9.9%により近づくなれば、17歳献血者の占める比率は更に高くなることが考えられる。17歳の献血率が4.7%に留まっている要因の一つは、輸血用血液製剤の医療機関における需要の多くが400ml全血由来の製剤に移行し、200ml全血由来の血液製剤の需要が低下していることが考えられる。今後、若年者の献血推進（特に17歳）を進めて行くには、需要と供給のアンバランスが発生させない為にも17歳献血者に400ml全血献血を導入していくことが必要と考える。献血不適格者数は16歳、17歳が他の年代と比較して全ての項目で高値であったのは、初回献血者がこの年齢で多いことに起因すると考える。副作用の発生は若年者で高いといわれているが¹⁾、200ml献血時のVVR軽症例の発生頻度は17歳男性では1.05%であり、18歳～29歳の2.14%よりは低く、30代の1.01%とほぼ同等であった（18歳1.76%、19歳2.23%）。また、17歳女性の200ml献血時のVVR軽症例の発生頻度1.35%は、18歳～29歳の1.09%および他の年代と比較するとやや高い値であったが、18歳、19歳の1.39%、1.47%と違いはなかった。

次に、全血献血の年齢の上限基準の見直しであるが、欧米では国により基準は異なり64歳から上限設定無しまで様々である。もし、本邦で74歳まで献血の上限年齢を引き上げた場合に見込まれる献血者数は年間6,573名で、全血総献血数の0.11%に限られることがわかった。これはカナダが2004年に献血の上限基準を見直した時に0.27%献血者が増加したとのGoldman報告²⁾と比較しても低い値である。男性の68歳、69歳の献血者のHb不足の率が高値を示していることは、70歳以上の献血者が継続して全血採血を行なえるかの重要なポイントと考える。阿部らの報告では、赤血球系は70歳以降より急速に造血機能が低下し、骨髓有核細胞数が減少、脂肪髄の増加が認められるが、これらの年齢では日常生活活動能（ADL）の違いによりHb値は大きく異なるとしている。献血者は基本的にADLが高い母集団と考えられるが、現行採血基準で全血献血を行なっている65歳以上群のHb分布を調査し、他の年代と比較することも必要と考える。

血小板献血の上限年齢は54歳であるが、欧米では血小板成分献血の年齢基準は全血献血の上限年齢を準用しており、採血の可否判定は検診医の判断に委ねられ、わが国より上限が高く設定されている。

そこで、現行の54歳の上限年齢を59歳に引き上げた場合に増加する献血者数を推定してみると、5.49%の血小板成分献血者数の増加に繋がる事がわかった。また、現在50歳～54歳の血小板成分献血者を対象として実施したアンケート調査では、90%以上の方は今後も血小板成分献血に協力すると回答し、85%以上の方が血小板献血の上限年齢は見直して賛成との回答が得られている。なお、血小板献血者数を年代別に見ると、男女とも年齢を増すごとに献血者数は減少しており、50～54歳の献血者は比較的献血に理解のある方が多く、そのことがアンケート結果に反映されているとも考えられる。今後は30代、40代の血小板献血者を対象としたアンケートも実施し、広い年代の意見をとりまとめることも必要と思われる。50代以上の成分献血者のHb不足の率が高い点であるが、愛知県赤十字血液センター古田らは³⁾、頻回の成分献血者で比重落ちの率が高いと報告している。成分献血時の事前採血の検体量や成分献血に用いるデスポーザブルキット内の残血などが要因の一つと考えられるが、成分献血を行なっている献血者の年代別のHb分布を調査し、年齢の要因が関与しているか否かを明確にすることは必要であろう。また、今回の集計結果ではVVRを含め、50代以上の献血者副作用の発生頻度は血小板・血漿献血ともは他の年代と比較して同等以下の率であったが、埼玉県赤十字血液センター溝口らは中年女性が血漿献血でVVRを発生した場合は回復が遷延する例を多く認めると報告している。高齢者の血小板献血におけるVVR回復時

間を調査し、回復時間の遷延の有無を確認しておくことも必要であろう。

血液比重による採血適否判定とHb簡易測定値との関係についてであるが、血液比重測定法と簡易Hb測定法はともに、手技を正しく行えば採血基準に従った適否判定に有用な手法と言える。H17年に実施された簡易Hb測定機器評価試験で、検査課自動血球計数装置の測定値と比較して平均値がやや低いことが確認されている。今回の検討は、同一検体を24～32時間後に検査課機器**で測定したHb値であるが、簡易Hb値は平均値で男性0.4、女性0.3 g/dLそれぞれ低い値を示していた。簡易Hb測定機器の誤差は±0.3 g/dLとされており、採血基準を下回る献血者からの採血が防止できる設定である。

Hb測定法への切り替えに伴い、現行基準値は健常男性のHb値と比較して低いことから、基準値を12.5から13.0 g/dLにひき上げた場合の採血予測を行ったところ、比重測定値1.053以上の判定時に比べ1.04%の減少が予測された。女性ではHbを現行基準と同じ12.5 g/dLと設定し、比重測定による判定と比較すると1.44%の減少が予測された。女性において、簡易Hb測定機器導入で献血者予測が減少する理由として、測定機器が本来のHb値よりやや低めに表示するよう設定されていることも影響していると思われる。

200mL採血数は減少傾向(H18年：200mL 26%、400mL 74%)にある。受血者にとり供血者数は少ないほうが望ましく、200mL採血は小児の輸血用に限定して採血している施設もある。200mLの採血基準を400mLと同一基準にひきあげた場合、200mL採血比率の低い九州地区ではほとんど影響がないと思われる。しかし、400mL確保に苦慮している地域では、冬季の献血者減少時期など採血計画の変更が必要となる可能性がある。Hb基準値の引き上げについては、今後予期しない感染症の流行や、供血者選択に新たな制限が加わる事態発生時などの血液確保も考慮して、検討されるべきであろう。

血液比重測定法は、基準値を満たすかどうかに限定した判定であるが、簡易Hb測定法では基準をはずれた献血申し込み者に対し、個々の状態に応じた健康指導が可能となる。Hb簡易測定機器導入後は、この利点を生かした健康指導体制も望まれる。

医学生の献血に対する意識調査であるが、今回の調査では35.1% (95%信頼区間29.9～40.7%)が献血をしたことがあるという結果となった。過去に行われた調査によると、19～29歳で献血経験のある人の割合は42.8%であり、この数値と比較すると本学医学生の献血経験者率は有意に低いことがわかる ($p<0.05$)。年齢が上がるにつれて献血経験の機会が増えると考え、本学医学生の献血経験者率の低さは、回答者の平均年齢が22.3歳と若いことによるものだと推測できる。

一方、1年間の献血率(最近1年間に献血した人数を母集団の人数で除した数値)は15.2% (95%信頼区間11.6～19.7%)であった。日本赤十字社によると平成18年度の20～29歳の献血率は7.6%であり¹⁾、平成19年度もこの数値が維持されると仮定すると、医学生の献血率は一般の献血率に対して有意に高いと言える ($p<0.05$)。

また、今後の献血状況に関しては、「1年に以内に絶対献血する」と回答した10.7% (95%信頼区間7.6～14.8%)の人が必ず献血すると仮定し、平成18年度の20～29歳の献血率が平成20年度も維持されると仮定すると、平成20年度も本学医学生の献血率は一般よりも有意に高くなると考えられる ($p<0.05$)。

では、本学医学生の献血率が高い理由は何なのであろうか。調査票の分析の結果、最近1年間に献血した45名のうち19名(42%)が初めて献血をしており、この19名のうち14名(73.7%)が主な献血場所として「大学の献血バス」と回答していることや、最近1年間に献血した45名のうち17名(37.8%)が「1年以内に絶対献血する」、16名(35.5%)が「1年以内に献血するつもりでいる」と回答していることが分かった。これらのことから、本学医学生の献血率の高さは、献血経験者が継続的に献血することに加え、毎年10月に開催される大学祭での献血バスの活動による初回献血者確保によって維持されていると推測することができる。

これまでの考察から、本学医学生は「献血経験者率は低い」が献血意志は高く、1度献血すると継続する可能性

が高い」という特徴を持つ集団であり、新規の献血者確保のための重要なターゲットとなり得ると結論づけることができる。

今後実際に医学生に対して献血のプロモーションを行う場合には、今回の調査結果で作成した献血意志関連モデルを参考にすると良い。未経験者のモデルでは、「あなたにとって、献血は義務の1つですか」、「近年、献血者数は増加していると思いますか、減少していると思いますか」が「規範意識」、「呼びかけられても献血しなかったとき、そのことを後悔することが多いですか」が「献血に対する態度」、「問25. 仮に献血する気持ちになった場合、確実に実行できると思いますか」が「統制感」とそれぞれのカテゴリーに入っており、TRAあるいはTPBの理論が当てはまることがわかる。一方、経験者のモデルはTRAやTPBの理論とは一致せず、「継続的に献血をしており、前回の献血でネガティブなイメージを持たず、特に阻害要因がなければ献血経験者は継続的に献血を行う」という構造になっていることがわかる。

よって、未経験者に対してはTRAおよびTPBの理論に基づいた戦略を、経験者に対しては「毎回の献血で悪いイメージを持たせないこと」を念頭においた戦略を採ると良い結果が得られると考えられる。また、初回献血者の確保に関しては献血バスが大きな効果を持っていることも考慮すべきである。

E. まとめ

年齢基準の見直しで多くの献血者の増加が見込まれることから、血小板成分献血の上限年齢(現行54歳)の見直しを第一優先のテーマとして検討を進めるべきである。次に17歳女性400ml全血献血でのデータ収集が今後の課題となる。全血献血の上限年齢の見直しについては、増加が見込まれる献血者数は少なく、60歳以上で比重落ち率が増加していることを考慮すると、研究の優先順位は低いと考えられる。

献血経験や意識に関する医学生調査では、献血経験者率は低いものの、献血率・献血意志は高い集団であり、献血プロモーションによる効果は十分得られることが示唆された。また、プロモーションの際には献血経験の有無によって異なる戦略を採ることが望ましいことも明らかにされた。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

予定あり

2. 学会発表

予定あり

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得

特になし

2. 実用新案登録

特になし

3. その他

特になし

Vasovagal reactions in high school students: findings relative to race, risk factor synergism, female sex, and non-high school participants

B.H. Newman

BACKGROUND: High school (HS) students have a high incidence of vasovagal reactions and are a good population for the study of vasovagal reactions.

STUDY DESIGN AND METHODS: Data from 1076 Caucasian students, 226 African-American students, and 157 nonstudents from HS blood drives in 2001 were entered into a database. Race, high-risk-factor synergism, the phenomenon of "survivorship," and female sex were evaluated. In addition, non-HS student participants were described.

RESULTS: Vasovagal reactions were 84 percent lower in African-American HS students than in Caucasian HS students (3 of 226 vs. 88 of 1076; 1.3 vs. 8.2 percent; $p = 0.0001$; relative risk, 6.2). In Caucasian HS students, first-time donor status increased the vasovagal reaction rate to 9.4 percent (vs. 3.6% in repeat donors, $p < 0.004$). Low weight (≤ 130 lb) increased the reaction rate to 13.6 percent (vs. 3.3% in weight > 81.2 kg, $p < 0.001$). Together they increased the reaction rate to 16.0 percent (vs. 3.2%, $p < 0.0001$). Females had more reactions than males (11.3 vs. 4.8%, $p < 0.001$), but the reaction rates equalized when donors under 150 lb were excluded (5.7 vs. 4.6%, $p = 0.66$).

CONCLUSION: African-American HS students had a significantly lower vasovagal reaction rate than Caucasian HS students. There was synergy among high-risk factors in Caucasian HS students. Female and male vasovagal reaction rates were similar when low-weight donors were excluded.

High school (HS) blood donors are young, frequently donate for the first time, and have a high incidence of vasovagal reactions. The high vasovagal reaction rate, which ranges from 8 percent to 11 percent,¹ makes them a unique population in which to study vasovagal reactions.

The following issues or questions were addressed in the present study. 1) Past studies have alluded to the possibility that African-American blood donors have fewer vasovagal reactions than Caucasians.^{2,3} This study quantified the risk of a vasovagal reaction in Caucasian and African-American HS students. 2) Several measurable risk factors such as youth, low weight, and first-time donation status are associated with an increase in vasovagal reactions.⁴⁻⁷ This study measured these risks and evaluated the degree to which they are additive. 3) Two recent studies reached different conclusions as to whether female sex increased the vasovagal reaction rate. One study found that confounding factors such as lower weight explained the higher vasovagal reaction rate in females,⁷ while another study, although unpublished, found that female sex by itself was a risk factor (N.R. Haley, written communication, September 2000). This study addressed this question by evaluating female and male vasovagal reactions in four weight groups, which in a stepwise fashion eliminated lower weight donors. In addition to addressing these issues or questions, the study also evaluated non-HS participants to determine the extent of their participation, their demographics, and their vasovagal reaction rate.

ABBREVIATIONS: HS = high school; RR(s) = relative risk(s).

From the American Red Cross Blood Services, SE Michigan Region, Detroit, Michigan.

Address reprint requests to: Bruce H. Newman, MD, Medical Director, American Red Cross Blood Services, SE Michigan Region, 100 Mack, Detroit, MI 48201; e-mail: newmanb@usa.redcross.org.

Received for publication May 22, 2002; revision received July 9, 2002, and accepted July 10, 2002.

TRANSFUSION 2002;42:1557-1560.

MATERIALS AND METHODS

Phlebotomy

HS blood donations were collected on-site at Detroit metropolitan high schools. The donors were screened using a 40-question questionnaire, a mini-physical exam consisting mainly of vital signs, and a Hb-screening test. Accepted blood donors were subjected to a whole blood phlebotomy and collection of additional blood samples, which together did not exceed 535 mL. Blood donors rested on the donor bed after donation and were advised to spend 10 minutes at the refreshment site. All vasovagal reactions were recorded on the blood donor record, and an additional report was submitted if syncope occurred.

Data collection

Data from 1076 Caucasian HS students, 226 African-American HS students, and 157 nonstudent participants taken from randomly chosen Caucasian and African-American HS blood drives in 2001 were entered into a database (Excel 1997; Microsoft Corporation, Seattle, WA). The data entered consisted of the donor's age, race, sex, self-reported weight, blood donation status (first-time or repeat donation), a unique unit whole blood number, and the donor's reaction status. In addition, blood pressure results from 100 randomly selected Caucasian students were compared with 100 randomly selected African-American students.

Statistical analysis

Two-by-two contingency tables and a two-tailed Fisher Exact test were used to determine *p* values and relative risks (RRs) with 95 percent CIs. *p* < 0.05 was considered to be significant.

RESULTS

Demographics

Table 1 identifies the demographics of Caucasian and African-American HS students and nonstudent participants. Caucasian and African-American HS students were similar for mean donor age, percentage of females, percentage of first-time donors, and percentage of donors who weighed no more than 130 lb, but African-American HS students weighed slightly more (166 vs. 157 lb).

Nonstudent participants were 10.8 percent of the total number of participants. In comparison to HS students, they were significantly older (mean age, 44 vs. 17 years), had a lower first-time donor rate (9 vs. 79%-82%), weighed significantly more (180 vs. 157-166 lb), and had a lower percentage of donors under who weighed no more than 130 lb (10 vs. 22%-24%).

Comparison of vasovagal reaction rates

The vasovagal reaction rate was 8.2 percent (88 of 1076) in Caucasian HS students versus 1.3 percent (3 of 226) in African-American HS students (*p* = 0.0001; RR, 6.2; 95 percent CI, 2.0-19.3) versus 1.3 percent (2 of 157) in nonstudent participants (*p* < 0.0004). Eight syncopal reactions occurred in the Caucasian HS students, and none occurred in the other two groups (*p* = 0.34 with African-American students). Blood pressure results in Caucasian and African-American HS students were compared as a potential cause for the vasovagal reaction rate difference between the two groups. Table 2 shows a comparison of blood pressures in 100 randomly selected Caucasian HS students and 100 randomly selected African-American HS students. The differences were not significant.

Additive effects of high-risk factors in Caucasian HS students

The additive effects of risk factors could only be evaluated in the Caucasian HS students because the other two groups had very few reactions. Table 3 shows the effect of different risk factors. A first-time donor had a vasovagal reaction rate of 9.4 versus 3.8 percent in a repeat donor (*p* < 0.002; RR, 2.6). A low-weight donor (\leq 130 lb) had a 13.6 percent vasovagal reaction rate versus 3.3 percent in a high-weight donor (\geq 180 lb) (*p* < 0.0001; RR, 4.0). Adding both risk factors together increased the reaction rate to 16.0 versus 3.2 percent in donors who lacked these factors (*p* < 0.004; RR, 5.0). Since 45 percent of the Caucasian females weighed no more than 130 lb and only 5 percent of the males weighed no more than 130 lb, female sex was added last because of the confounding factor of low weight. The four factors increased the reaction percentage to 16.4 versus 3.8 percent in those who lacked these factors (*p* < 0.01; RR, 5.0).

TABLE 1. Blood donor demographics in Caucasian, African-American, and nonstudent participants

Population	Number	Mean age (years)	Females percentage	First-time donor percentage	Mean weight (lb)*	Percentage weighing no more than 130 lb
Caucasian HS students	1076	17	49	79	157 (150)	24
African-American HS students	226	17	47	83	166 (160)	22
Nonstudent participants	157	44	52	9	180 (180)	10

* Number in parentheses is median.

Repeat Caucasian donations (the "survival" phenomenon)

Repeat donors weighed more than first-time donors (163 vs. 155 lb), but the percentage of males and the percentage of females weighing no more than 59.0 kg in the two groups were statistically the same. Eighty-four percent of the repeat donors donated their second lifetime unit and 16 percent donated their third lifetime unit, based on a random sample of 50 HS blood donors. Repeat donors had a 60 percent reduction (3.8 vs. 9.4%) in their vasovagal reaction rate, but there was no synergistic benefit when additional factors such as "high weight" (weight \geq 81.7 kg) or "male sex" or "both" were added to repeat donor status.

Vasovagal reactions in females

Table 4 shows the vasovagal reaction rate in Caucasian girls and boys at four different weight scenarios. Vasovagal reactions were higher in females than males when all donors were included (11.3 vs. 4.8%, $p = 0.002$) or when donors under 130 lb were excluded (9.4 vs. 5.0%, $p = 0.018$). Vasovagal reactions in females and males were similar when donors under 150 lb were excluded (5.7 vs. 4.6%, $p = 0.66$).

DISCUSSION

Caucasian HS students have a high predisposition toward blood donation-related vasovagal reactions because of their youth, high percentage of first-time donations, and lower weight.⁴⁻⁷ Other studies have also shown that history of syncope and psychological factors can also increase vasovagal syncope reaction rates.⁸ The percentage of vasovagal reactions in first-time, mainly Caucasian HS donors has been reported to be as high as 8.7 times greater than in experienced blood donors.¹

Thus, Caucasian HS students represent an excellent population in which to study vasovagal reactions.

Two studies provided some evidence that African-Americans might have a lower predisposition for blood donation-related vasovagal reactions than Caucasians.^{2,3} The present study is the first to quantify and compare the risk in two relatively equal groups of Caucasian and African-American HS students. African-American HS students have a vasovagal donor reaction that is 84 percent lower than Caucasian HS students (1.3 vs. 8.2%, $p < 0.0001$), and none of the eight syncopal vasovagal reactions occurred in the African-American group (0 vs. 0.74%, $p = 0.34$), although the differences in syncope between the two groups did not reach significance. Several studies have shown that elevated systolic blood pressure is protective against vasovagal reactions.⁵⁻⁷ This potential explanation was studied but did not account for the differences between African-American and Caucasian vasovagal reaction rates (see Table 2).

Several studies have also demonstrated synergy among risk factors.^{2,5,7} Graham² studied 352 Caucasian blood donors in 1957 (published 1961) in a hospital setting. The risk of a vasovagal reaction in his setting was

TABLE 2. Comparison of blood pressures in randomly selected Caucasian and African-American HS students

	Caucasian students	African-American students	p value*
Number	100	100	NA
Male percentage	61	52	0.2538
First-time percentage	73	85	0.0554
Mean BP†	115.6/71.3	117.4/71.6	0.36/0.84
Median BP	114/70	117/70	NA
Systolic BP \leq 100 (%)	16	15	1.000
Systolic BP \geq 140 (%)	7	13	0.2381
Diastolic BP \leq 60 (%)	16	15	1.000
Diastolic BP \geq 80 (%)	24	28	0.6289
Mean BP (females)	111.2/69.5	115/71.2	0.24/0.46
Mean BP (males)	118.4/72.5	119.6/72.5	0.62/0.71

* $p < 0.05$ is clinically significant.

† BP = blood pressure.

TABLE 3. Additive effects of risk factors in Caucasian HS students

Risk factor(s)	Vasovagal reaction rate (%)	p value*	RR (95% CI)
HS student	88/1076 (8.2)		
HS student; FT† donor (A1)	80/853 (9.4)	0.002	2.6 (1.3-5.3)
HS student; weight \leq 130 lb (B1)	36/264 (13.6)	<0.0001	4.1 (1.9-8.6)
HS student; FT donor; weight \leq 130 lb (C1)	35/219 (16.0)	<0.004	5.0 (1.2-20.4)
HS student; FT donor; weight \leq 130 lb; female (D1)	32/195 (16.4)	<0.01	4.3 (1.1-17.6)
HS student; repeat donor (A2)	8/223 (3.6)		
HS student; weight \geq 180 lb (B2)	8/239 (3.3)		
HS student; repeat donor; weight \geq 180 lb (C2)	2/63 (3.2)		
HS student; repeat donor; weight \geq 180 lb, male (D2)	2/53 (3.8)		

* Comparisons were made between A1 and A2, B1 and B2, etc.

† FT = first-time.

TABLE 4. Comparison of vasovagal reaction rates for females and males for four different weight groups

	Females*	Males*	p value†
≥ 110 lb			
All	51/523 (11.3)	27/553 (4.8)	0.002
First-time	55/422 (13.0)	25/433 (5.8)	0.0004
Repeat	4/101 (4.0)	2/120 (1.7)	1.000
≥ 130 lb			
All	32/341 (9.4)	27/537 (5.0)	0.018
First-time	29/266 (10.9)	23/417 (5.5)	0.011
Repeat	3/75 (4.0)	4/120 (3.3)	1.000
≥ 150 lb			
All	8/141 (5.7)	19/415 (4.6)	0.660
First-time	7/109 (6.4)	16/323 (5.0)	0.633
Repeat	1/32 (3.1)	3/92 (1.6)	1.000
≥ 180 lb			
All	1/44 (2.3)	7/191 (3.7)	1.0
First-time	1/34 (2.9)	5/138 (3.6)	1.0
Repeat	0/10 (0)	2/53 (3.8)	1.000

* Data presented as n (%).
† p < 0.05 is different.

quite high (15%), and a combination of factors increased the risk to 35 percent to 71 percent in some scenarios. Tomasulo et al.⁵ and Kasprisin et al.⁶ in blood center studies showed much lower risks. The risks in those two studies did not exceed 6.4 percent, even when risks were combined. The present study evaluated low-weight (≤ 59.0 kg) and first-time donation status in Caucasian HS students and found that low weight was a more significant factor than first-time donation status based on RRs (4.0 vs. 2.6) (see Table 3). Trouern-Trend et al.⁷ found the same pattern in a study of vasovagal syncopal reactions. When low-weight and first-time donation status were combined, the risk was even greater (RR, 5.0). However, female sex barely affected the risk, when it was added as a fourth "risk" factor (RR, 4.3) because most of the "low-weight" individuals (< 130 lb) had already been excluded.

Repeat blood donors had a 60 percent decrease in vasovagal reactions (3.8 vs. 9.5%, $p < 0.004$) and adding other positive factors such as "high weight," "male," or "both" did not provide any additional benefit. Thus, repeat blood donation status alone is a good predictor for a low vasovagal reaction rate in HS students.

Female sex as a risk factor was evaluated by observing the vasovagal reaction rate in a stepwise fashion as lower weight donors were removed. The pattern clearly showed that lower weight (≤ 130 lb), which is much more common in females than in males (45 vs. 5%), was a major factor for increased vasovagal reactions in females. However, when donors under 150 lb were excluded, there were no differences between female and male vasovagal reaction rates. Thus, low weight is the main factor that causes a high reaction rate in females.

One limitation in this study was the low number of repeat donors. This influenced the RR ratios by increasing variability and decreasing precision. A second limitation was the size of the African-American population studied. It was too small to evaluate the causes of vasovagal reactions in the population.

In summary, this study showed that African-American HS students have a significantly lower vasovagal reaction rate than Caucasian HS students. There is synergy among high-risk factors and low weight is a more significant risk factor than first-time donor status. Although females have more vasovagal reactions than males, this is mainly due to lower weight, and the differences disappeared when donors under 150 lb were excluded. Repeat HS

blood donors have 60 percent fewer vasovagal reactions, and a successful first-time donation is a good predictor of future success.

ACKNOWLEDGMENTS

The author thanks Monique Gamblin and Torrance Hucks for data entry and Edward Notari for help with the statistics.

REFERENCES

1. Khan W, Newman B. Comparison of donor reaction rates in high school, college, and general blood drives (abstract). *Transfusion* 1999;39:31S.
2. Graham DT. Prediction of fainting in blood donors. *Circulation* 1961;23:901-6.
3. Khan W, Newman B. Vasovagal donor reactions at high school blood drives (abstract). *Transfusion* 1999;39:32S.
4. Poles FC, Boycott M. Syncope in blood donors. *Lancet* 1942;2:531-5.
5. Tomasulo PA, Anderson AJ, Paluso MB, et al. A study of criteria for blood donor deferral. *Transfusion* 1980;20:511-8.
6. Kasprisin DO, Glynn SH, Taylor F, et al. Moderate and severe reactions in blood donors. *Transfusion* 1992;32:23-6.
7. Trouern-Trend J, Cable R, Badon S, Newman B, Popovsky M. A case-controlled multicenter study of vasovagal reactions in blood donors: Influence of gender, age, donation status, weight, blood pressure, and pulse. *Transfusion* 1999;39:316-20.
8. Newman B. Donor reactions and injuries from whole blood donations (review). *Transfus Med Rev* 1997;11:64-75. ■

Donor reactions in high-school donors: the effects of sex, weight, and collection volume

B.H. Newman, S.L. Satz, N.M. Janowicz, and B.A. Siegfried

BACKGROUND: The high incidence of donor reactions in first-time, 17-year-old Caucasian whole-blood donors makes this group ideal for the study of donor reactions.

STUDY DESIGN AND METHODS: Donor reaction rates were retrospectively evaluated in 7274 first-time, 17-year-old Caucasian whole-blood donors based on observations recorded at the collection sites. The effect of sex and weight on donor reactions was determined. In addition, a model was developed to estimate how different blood collection volumes would affect donor reaction rates.

RESULTS: The donor reaction rate was 12.0 percent (870/7274). Female donors overall had a higher donor reaction rate than male donors (16.7% vs. 7.3%) and also had a higher donor reaction rate than male donors at each 20-lb weight interval in the range from 110 to 189 lb. A model suggested that a change in the blood-unit volume from 450 to 500 mL would increase donor reaction rates by 18 percent in either female or male donors, whereas a reduction in the blood-unit volume from 500 to 400 mL would decrease donor reaction rates by 29 and 27 percent in female and male donors, respectively.

CONCLUSION: First-time, 17-year-old Caucasian female donors had a higher donor reaction rate than male donors overall and at equivalent donor weights. In the range of present US blood-unit volumes, a change in collection of as little as 50 mL could have a significant impact on blood donor reaction rates in high-school students.

Clinical studies have evaluated the incidence of blood donor reactions¹ and have studied the correlation of donor characteristics such as weight,²⁻⁶ age,³⁻⁶ first-time or repeat donor status,³⁻⁶ race,⁶⁻⁸ and sex^{3,4,6} to donor reaction rates. This study evaluated first-time, 17-year-old, Caucasian high-school students because these donors have a very high donor reaction rate of approximately 9 to 11 percent,^{6,9} which is seven to nine times higher than the donor reaction rate in an experienced, general donor population.² We evaluated two nonfixed variables (sex, weight), but three variables (donor status, age, race) were fixed. We also developed a model for donor reaction rates as a function of sex and the ratio of whole-blood collection volume per donor weight, which allowed us to estimate the effects of various whole-blood collection volumes.

MATERIALS AND METHODS

Blood donor suitability and phlebotomy

High-school blood donors met acceptability criteria before being subjected to phlebotomy. The donors then lay in a supine position, and a 525-mL phlebotomy was performed in the antecubital fossa of the arm with a 16-gauge needle. The blood collection volume included 481 mL in a whole-blood unit, 33 mL in tubes for post-donation tests, and 11 mL trapped in the plastic tubing. Blood donor reactions observed at the collection site were recorded. A "donor reaction" was defined as the presence of any of the following symptoms or signs during or shortly after whole-blood donation: dizziness, diaphoresis (sweating), sudden weakness, hypotension, bradycardia, and syncope (faint). Approximately 97 percent of the reactions were nonsyncopal reactions.

Blood donor selection and data analysis

All high-school blood drive donor history records from 77 blood drives between October 1, 2003, and March 23, 2004, were reviewed. Donor selection was limited to 17-year-old, first-time, Caucasian donors who successfully donated a whole-blood unit. Studies have shown that African-American donors have a considerably lower donor

From the American Red Cross Blood Services, Southeastern Michigan Region, Detroit, Michigan; and the Wayne State University School of Medicine, Detroit, Michigan.

Address reprint requests to: Bruce H. Newman, MD, Medical Director, American Red Cross Blood Services, SE Michigan Region, 100 Mack Avenue, Detroit, MI 48201; e-mail: newmanb@usa.redcross.org.

Received for publication May 18, 2005; revision received June 24, 2005, and accepted June 27, 2005.

doi: 10.1111/j.1537-2995.2006.00713.x

TRANSFUSION 2006;46:284-288.

rate than Caucasian donors, so African-American donors were excluded from the study.^{6,7} The decision to use successful donations and exclude unsuccessful donations was an arbitrary one. A total of 7274 donor history records were deemed suitable for evaluation.

Statistical analysis

Confidence intervals (CIs) for reaction rates were calculated as minimum-length intervals by integration of the Bayesian posterior with diffuse priors¹⁰ with the assistance of computer software (the Solver tool in Microsoft Excel 2002, Microsoft Corp., Redmond, WA). Logistic regression was performed with Epi Info.¹¹ Proportion comparisons were done with the Fisher Exact test.

RESULTS

Donor weight distribution

Figure 1 shows a bell-shaped curve for male donors, with some skewing toward higher weights. In contrast, the curve for female donors appears truncated, suggesting that many Caucasian high-school female donors weighed less than 110 lb and could not donate blood.

Donor reaction rates in 17-year-old, first-time Caucasian blood donors

Table 1 shows the donor reaction rate for the total population and for each sex in 20-lb incremental weight groups. The donor reaction rate for the total population was 12.0 percent. Female donors had a 2.3-fold higher donor reaction rate than male donors, 16.7 percent versus

7.3 percent, and female donors had higher donor reaction rates within equivalent weight groups. Female donor reaction rates were 61 to 149 percent greater than male donor reaction rates, depending on the weight group. Figure 2 shows the donor reaction rates versus weight for female and male donors. Donor reaction rates appeared to decrease asymptotically as donor weights increased. Thus, logistic regression of reaction rate against a linear function of coded sex, reciprocal weight, and the product of coded sex and reciprocal weight—representing an interaction between sex and weight—was performed. The model was

$$\ln\left(\frac{r}{1-r}\right) = a + bs + \frac{c}{w} + \frac{ds}{w}, \quad (1)$$

where r is proportion of donors of coded sex s and weight w having a reaction; $s = 0$ if donor is male or 1 if donor is female; w is donor weight (lb); and a , b , c , and d are constants.

The coefficient d of the term representing sex-weight interaction was not significantly different from zero ($p = 0.09$ by a two-tailed test), so this term was omitted from the model. The remaining constants were found to have the following values: $a = -4.2941$, $b = 0.6120$, and $c = 284.1776$. All were significantly different from zero ($p < 0.0001$ by a two-tailed test). These constants yield the following formulas, which are plotted in Fig. 2.

$$\ln\left(\frac{r}{1-r}\right) = -4.2941 + \frac{284.1776}{w} \text{ for male donors} \quad (2)$$

$$\ln\left(\frac{r}{1-r}\right) = -3.6821 + \frac{284.1776}{w} \text{ for female donors.} \quad (3)$$

These formulas were used to give estimates of donor reaction rates at infinite weight, which were 2.5 percent for female donors and 1.3 percent for male donors. In a more practical context, the estimated donor reaction rates at 300 lb were 6.1 percent for female donors and 3.4 percent for male donors.

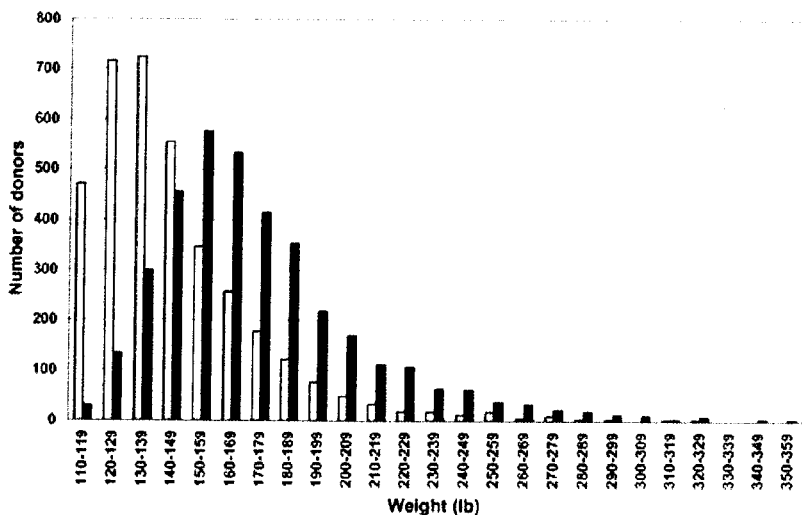


Fig. 1. Weights of first-time Caucasian high-school donors. (□) Female donors; (■) male donors.

Model for the effect of different blood-unit volumes on blood donor reaction rates

There is evidence that lower blood collection volumes are associated with lower reaction rates (see Discussion). We propose a unifying hypothesis that, for 17-year-old, first-time Caucasian donors, the donor reaction rate is a function of sex and the ratio of whole-blood collection volume to donor weight. Using the fact that Equations 2 and 3 were based on data obtained using a collection volume of 525 mL,

TABLE 1. Donor reaction rates in first-time, Caucasian high-school students

Donor sex	Weight (lb)						Total
	110-129	130-149	150-169	170-189	190-209	210+	
Female							
Number of reactions/number of donations	248/1187	206/1278	90/602	36/298	12/124	10/116	602/3605
Percent reactions	20.9	16.1	15.0	12.1	9.7	8.6	16.7
Male							
Number of reactions/number of donations	19/164	73/754	103/1108	39/768	15/386	19/489	268/3669
Percent reactions	11.6	9.7	9.3	5.1	3.9	3.9	7.3
Total							
Number of reactions/number of donations	267/1351	279/2032	193/1710	75/1066	27/510	29/605	870/7274
Percent reactions	19.8	13.7	11.3	7.0	5.3	4.8	12.0

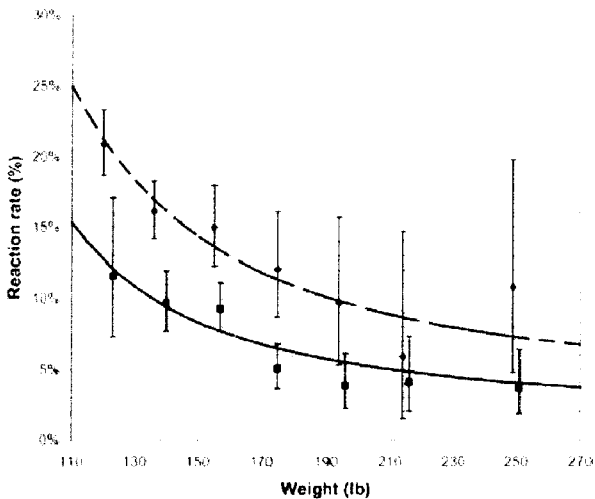


Fig. 2. Donor reaction rates in first-time Caucasian high-school students. Collections for each sex were grouped into 20-lb weight intervals for donor weights from 110 through 229 lb and a single interval for weights of 230 lb or more. The x coordinate of each group is the median weight, and the y coordinate is the reaction rate and its 95 percent CI. Curves were derived by logistic regression, as described under Materials and Methods. (◆) 95 percent CI, female donors; (■) 95 percent, male donors; (---) model, female donors; (—) model, male donors.

these equations were generalized to be consistent with the hypothesis

$$\ln\left(\frac{r}{1-r}\right) = -4.2941 + 0.5412907 \frac{v}{w} \text{ for male donors} \quad (4)$$

$$\ln\left(\frac{r}{1-r}\right) = -3.6821 + 0.5412907 \frac{v}{w} \text{ for female donors,} \quad (5)$$

where *v* is the blood collection volume in mL. When *v* = 525, Equations 4 and 5 are simplified to Equations 2 and 3, respectively.

The collection volume is the blood-unit volume plus the volume of blood in collection-set tubing and samples for testing. As previously stated, the latter is estimated to

TABLE 2. Expected donor reaction rates at other collection volumes (reactions per 100 collections)

Sex	Blood-unit volume (mL)						
	500	481	450	400	350	300	250
Female	17.8	16.7	15.1	12.7	10.7	8.9	7.4
Male	7.8	7.3	6.6	5.7	4.8	4.1	3.5

TABLE 3. Expected effects of blood-unit volume changes on donor reaction rates*

Sex	Blood-unit volume change (mL)		
	450 to 500	500 to 400	500 to 250
Female	+2.7 (+17.9%)	-5.1 (-28.7%)	-10.4 (-58.4%)
Male	+1.2 (+18.2%)	-2.1 (-26.9%)	-4.3 (-55.1%)

* Absolute change in reactions per 100 collections (relative change).

be 44 mL. Table 2 uses this estimate, the above model, and this study's donor weight distribution to give expected donor reaction rates at various blood-unit volumes. Table 3 compares the expected rates at different blood-unit volumes. The model suggests that an increase in the whole-blood unit volume from 450 to 500 mL would cause a 1.2-2.7 percent absolute increase in the donor reaction rate and a 17.9 to 18.2 percent relative increase in the donor reaction rate in first-time, Caucasian, high-school donors. Female donors had a greater absolute increase in the donor reaction rate (2.7 reactions per 100 collections vs. 1.2), but both sexes had similar relative increases of approximately 18 percent. A decrease in the whole-blood collection volume from 500 to 400 mL would decrease the donor reaction rate by 27 to 29 percent. Female donors would have a greater absolute decrease in the donor reaction rate (5.1% vs. 2.1%), but female and male donors would have a similar relative decrease (29% vs. 27%).

DISCUSSION

Donor reactions are common. In a recent study, 7.0 percent of 1000 randomly selected interviewed whole-

blood donors had a donor reaction.² The rate was 2.5 percent based on observation at the collection site, but an additional 4.5 percent were found after a donor interview 3 weeks later. Approximately 97 percent of the donors had mild reactions, meaning that the donors had symptoms and signs such as dizziness, diaphoresis, pallor, and sudden weakness but did not faint. A 1-year follow-up showed that donors who had a reaction were 34 percent less likely than asymptomatic donors to return and donate again within a 1-year period.¹² Studies show that the blood donation return rates are even lower when donors had syncope.¹³⁻¹⁵ Therefore, it is clear that a non-syncope donor reaction decreases a donor's return rate, and syncope further decreases the return rate. Donor reactions are also a donor safety issue. One study showed a 14 percent injury rate in donors who progressed to syncope.¹⁶ These injuries were often to the head and were generally minor, but lacerations and fractures occasionally occur. Serious injuries such as a closed-head injury are very rare but possible.

Three key factors associated with the probability of a donor reaction are weight,²⁻⁶ age,³⁻⁶ and first-time or repeat donor status.³⁻⁶ Weight and age are the most important factors, and first-time or repeat donor status has marginal importance.¹⁷ High weight, high age, and repeat status all protect donors against donor reactions. Caucasian donors have more risk for a donor reaction than African-American donors have.⁶⁻⁸ Several studies have shown that female donors have more donor reactions than male donors,^{3,4,6} but this was thought to be due to the female donor's smaller size because when female and male high-school donors over 149 lb were compared, the donor reaction rates were the same.⁶ In addition, in 850 first-time, Caucasian donors from the same study, there were no differences in donor reaction rates when female and male donors in equivalent 20-lb weight groups were compared.⁶ This study evaluated 8.6-fold more donors (7274 vs. 850) and detected large differences between reaction rates of female and male first-time Caucasian donors of similar weight.

Based on safety data for a 500 mL collection volume from a large blood center¹⁸ and from the American Red Cross, most blood centers increased their whole-blood unit volume from 450 mL to a higher value. The American Red Cross collects 481 mL in each unit but 525 mL in total volume. This volume can be collected in any donor—even a donor with the lowest allowable weight, 110 lb (50 kg)—because it meets the AABB standard for a maximum whole-blood collection volume of 10.5 mL per kg of body weight.¹⁹ Other blood centers collect two different whole-blood units—a 450-mL unit for low-weight donors and a 500-mL unit for donors weighing over approximately 120 lb.

A large blood center compared donor reaction rates in 282,000 donors who donated 450-mL whole-blood

units and 547,000 donors who donated 500-mL whole-blood units.¹⁸ The center did not detect a difference in donor reaction rates, which were 1.36 and 1.28 percent, respectively. But the subjects were from the general donor population, approximately 80 percent of whom were repeat donors and were much older and heavier than high-school students. A more sensitive study would have compared equivalent groups of very-high-risk donors such as the lower-weight female donors in this study, but this would have required entry of donor weight into the blood center's database, which is often not done.

In the donors studied here, the effect of two variables, sex and weight, on the reaction risk were determined. Three other variables, age, race, and first-time donor status, were fixed. It is probable but unproven that the bulk of the reactions in this group were caused by these five risk factors. Future studies could measure other factors that are thought to be associated with reactions such as a history of a donor reaction or being in the environment of a "group reaction." One could determine if there was an independent contribution from each variable by use of a logistics regression analysis, and such analysis could also quantify the contribution.

The model in this study, which relates the donor reaction rate in first-time, Caucasian high-school students to sex and the ratio of blood collection volume to donor weight, suggests that a 50-mL increase in whole-blood collection volume increased donor reaction rates by 18 percent. The model also suggests that a decrease in the blood-unit volume from 500 to 400 mL would decrease donor reaction rates by 29 percent in female donors and 27 percent in male donors, which is a very significant improvement. These lower rates are supported by Japanese data. The Japanese collect 400-mL (70% of collections) and 200-mL (30% of collections) units. They report a donor reaction rate of 0.6 to 0.7 percent based on 3.3 million whole-blood donations (H. Ikeda, Japanese Red Cross Society Central Blood Center, Japan; and M. Satake, Tokyo Red Cross Blood Center, Japan; written communications, 2003). Our data and model indicate that collecting 400-mL whole-blood units might be particularly effective in reducing donor reaction rates in young, low-weight, and first-time donors.

One limitation in this study was the lack of high-weight female donors. This made it difficult to show sex-related differences at high weights. A second limitation was that the data were based solely on observation of donors. In another study, a postdonation interview increased the number of reactions detected in a general donor population 2.3-fold, from 2.5 to 7.0 percent.² We do not believe that limiting the study to successful donations had an effect. The rate of unsuccessful donations in 4340 high-school students in the fall and winter of 2004 in our center was 5.0 percent (219/4340). It was 4.0 percent (21/525) in donors with a reaction and 5.2 percent (198/3815)

in donors with no reaction ($p = 0.21$). These data also challenge the perception that donor reactions are associated with more unsuccessful donations.

In conclusion, first-time, female Caucasian high-school students have a much higher donor reaction rate than male donors of equivalent weight. A model suggested that a change in the blood-unit volume from 450 to 500 mL would increase the donor reaction rate in this group by approximately 18 percent, and a decrease in the blood-unit volume from 500 to 400 mL would decrease the donor reaction rate by 27 to 29 percent. This kind of decrease in donor reaction rates would have a significant positive impact on safety and blood donor retention rates—particularly in first-time, lower-weight, high-school donors and other donors at high risk.

REFERENCES

1. Newman BH. Donor reactions and injuries from whole-blood donation. *Transfus Med Rev* 1997;11:64-75.
2. Newman BH, Pichette S, Pichette D, Dzaka E. Adverse effects in blood donors after whole-blood donation: a study of 1,000 blood donors interviewed 3 weeks after whole-blood donation. *Transfusion* 2003;43:598-603.
3. Trouern Trend JJ, Cable RG, Badon SJ, et al. A case-controlled study of donor reactions in blood donors: influence of sex, age, donation status, weight, blood pressure, and pulse. A case-controlled multicenter study. *Transfusion* 1999;39:316-20.
4. Tomasulo P, Anderson AJ, Paluso MB, et al. A study of criteria for blood donor deferral. *Transfusion* 1980;20:511-8.
5. Kasprisin DO, Glynn SH, Taylor Miller KA. Moderate and severe reactions in blood donors. *Transfusion* 1992;32:23-6.
6. Newman BH. Donor reactions in high school students: findings relative to race, risk factor synergism, female sex, and non-high school participants. *Transfusion* 2002;42:1557-60.
7. Newman B, Siegfried B, Buchanan L. The effect of ethnicity on the incidence of donor reactions in first-time whole-blood donors [letter]. *Transfusion* 2005;45:1398-9.
8. Graham DT. Prediction of fainting in blood donors. *Circulation* 1961;23:901-6.
9. Khan W, Newman B. Comparison of donor reaction rates in high school, college, and general blood drives [abstract]. *Transfusion* 1999;39(Suppl):31S.
10. Ross TD. Accurate confidence intervals for binomial proportion and Poisson rate estimation. *Comput Biol Med* 2003;33:509-31.
11. Dean AG, Arner TG, Sunki GG, et al. Epi Info, a database and statistics program for public health professionals. Atlanta (GA): Center for Disease Control and Prevention; 2002.
12. Newman B, Newman D. The effect of the blood donor's physical experience on blood donor return rates. *Transfusion* 2003;43(Suppl):140A.
13. Cable R, Trouern-Trend JJ, Badon SJ. The effect of blood donor syncopal reactions on subsequent blood donation [abstract]. *Transfusion* 1999;39(Suppl):114.
14. Gorlin JB, Petersen J. Reactions in first-time high school blood donors. *Transfusion* 2004;44:463.
15. Siegfried B, Newman B. Effect of reaction in allogeneic whole-blood donors on intervals from donation to next presentation [abstract]. *Transfusion* 2004;44(Suppl):78A.
16. Newman BH, Graves S. A study of 178 consecutive vasovagal syncopal reactions from the perspective of safety. *Transfusion* 2001;41:1475-9.
17. Newman BH, Roth AJ. Estimating the probability of a blood donation adverse event based on 1000 interviewed whole-blood donors. *Transfusion* 2005;45:1715-21.
18. Bianco C, Robins JL. Whole blood collection volumes and donor safety: equivalence between 450 mL and 500 mL collections [abstract]. *Transfusion* 1994;34(Suppl):15S.
19. Fridey JL, editor. Standards for blood banks and transfusion services. 22nd ed., Reference Standard 5.4.1A. Bethesda: American Association of Blood Banks; 2003. p. 69-73. ■

The American Red Cross donor hemovigilance program: complications of blood donation reported in 2006

Anne F. Eder, Beth A. Dy, Jean M. Kennedy, Edward P. Notari IV, Annie Strupp, Mary Ellen Wissel, Ramakrishna Reddy, Joan Gible, Marcia D. Haimowitz, Bruce H. Newman, Linda A. Chambers, Christopher D. Hillyer, and Richard J. Benjamin

BACKGROUND: The American Red Cross (ARC) initiated a comprehensive donor hemovigilance program in 2003. We provide an overview of reported complications after whole blood (WB), apheresis platelet (PLT), or automated red cell (R2) donation and analyze factors contributing to the variability in reported complication rates in our national program.

STUDY DESIGN AND METHODS: Complications recorded at the collection site or reported after allogeneic WB, apheresis PLT, and R2 donation procedures in 36 regional blood centers in 2006 were analyzed by univariate and multivariate logistic regression.

RESULTS: Complications after 6,014,472 WB, 449,594 PLT, and 228,183 R2 procedures totaled 209,815, 25,966, and 12,282 (348.9, 577.5, and 538.3 per 10,000 donations), respectively, the vast majority of which were minor presyncopal reactions and small hematomas. Regional center, donor age, sex, and donation status were independently associated with complication rates after WB, PLT, and R2 donation. Seasonal variability in complications rates after WB and R2 donation correlated with the proportion of donors under 20 years old. Excluding large hematomas, the overall rate of major complications was 7.4, 5.2, and 3.3 per 10,000 collections for WB, PLT, and R2 procedures, respectively. Outside medical care was recorded at similar rates for both WB and automated collections (3.2 vs. 2.9 per 10,000 donations, respectively).

CONCLUSION: The ARC data describe the current risks of blood donation in a model multicenter hemovigilance system using standardized definitions and reporting protocols. Reported reaction rates varied by regional center independently of donor demographics, limiting direct comparison of different regional blood centers.

Blood donation by healthy volunteers assures the availability of blood components for transfusion, which is a central tenet of modern health care. Accrediting and regulatory agencies (e.g., Joint Commission on Accreditation of Healthcare Organizations, Food and Drug Administration [FDA]) identify blood transfusion as a core function essential to quality medical care and promulgate specific requirements for appropriate use of blood components. Scientific efforts to improve blood safety have duly focused on the patient-recipient of blood transfusion and have substantially reduced the risk of infectious disease transmission. Similar scrutiny has not been applied to reducing the risk of blood donation, even though the infrequent occurrence of serious injury after blood donation may arguably now rival the residual risk of transfusion-transmitted infection.

ABBREVIATIONS: ARC = American Red Cross; LOC = loss of consciousness; R2 = automated red cell (donation).

From the Biomedical Services, Medical Office, National Headquarters, American Red Cross, Washington, DC; the Jerome H. Holland Laboratory, American Red Cross, Rockville, Maryland; the Lewis and Clark Region, American Red Cross, Salt Lake City, Utah; the Central Ohio Region, American Red Cross, and the Riverside Methodist Hospital & Grant Medical Center, Columbus, Ohio; the Midwest Region, American Red Cross, Omaha, Nebraska; the Greater Chesapeake and Potomac Region, American Red Cross, Baltimore, Maryland; the Southern California Region, Pomona, California; the Southeastern Michigan Region, American Red Cross, Detroit, Michigan; and the Southern Region, American Red Cross, Douglasville, Georgia.

Address reprint requests to: Dr Anne Eder, MD, PhD, Biomedical Services, National Headquarters, American Red Cross, 2025 E Street NW, Washington, DC 20006; e-mail: EderA@usa.redcross.org.

Received for publication January 16, 2008; revision received April 19, 2008, and accepted April 21, 2008.

doi: 10.1111/j.1537-2995.2008.01811.x

TRANSFUSION 2008;48:1809-1819.

The blood supply depends entirely on the daily commitment of altruistic volunteers, who ostensibly gain little personal benefit from blood donation but are exposed to potential risk of discomfort, complications, and in rare cases, injury resulting from the collection procedure. Approximately 2 to 6 percent of all presenting donors experience a complication, most of which previously have been classified as light, mild, or minor reactions that resolve promptly but are still unpleasant for the donor.¹⁻⁹ Serious injury occurs infrequently, but typically results from a loss of consciousness (LOC), either at the donation site or after leaving the premises. Donor characteristics that correlate with higher syncopal complication rates after whole blood (WB) donation include young age, first-time donation status, low weight or total blood volume, female sex, and Caucasian race, although these may not all be independent predictors of reactions.⁶⁻¹⁰ Changing population and donor demographics during the period 1996 through 2005 revealed that blood collection from young donors, aged 16 to 19 years, was increasing whereas blood donation rates by older individuals was declining.¹¹

In light of these demographic trends, blood centers should continuously strive to improve the donation experience for all donors and should have an effective and comprehensive program to monitor donor complications as the keystone of a donor safety program. The importance of donor adverse reactions has been highlighted in the recent efforts by the AABB to initiate a US biovigilance program.¹² Our experience now provides a model system to assess the advantages and limitations of a national donor hemovigilance program.

Each year, the American Red Cross (ARC) has nearly 7 million encounters with individuals who present to donate WB or apheresis components to provide more than 40 percent of the US blood supply. The ARC established a national hemovigilance program to systematically analyze donor complications at its 36 blood regions. We describe annual hemovigilance data from 2006 and analyze factors contributing to variability in reported overall reaction rates in our system, which may serve as a basis for further improvements in hemovigilance efforts to protect healthy, volunteer blood donors.

MATERIALS AND METHODS

In 2003, ARC initiated a comprehensive hemovigilance program that prospectively collects data on events that occur at the time of donation, or that are reported later, including reports of donors receiving outside medical care. In mid-2005, the event definitions (Table 1) were modified to include citrate reactions for automated collections and the national reporting system was updated and fully implemented. This report describes data gathered in the first full calendar year of the modified program.

Collection site procedures

The 36 regional blood regions follow standard procedures for WB and automated collections from volunteer, allogeneic donors. WB is collected into 500-mL collection sets (Fenwal, Inc., Round Lake, IL; Pall Medical, Inc., East Hills, NY). The mean volume of collection is 517 ± 10 mL with trip scales and 524 ± 10 mL with electronic scales. Apheresis platelets (PLTs) are collected with one of three apheresis devices: Amicus (Baxter Healthcare, Round Lake, IL), Spectra (Gambro BCT, Lakewood, CO), or Trima (Gambro BCT). Automated red cell (R2) procedures for 2-unit red cell (RBC) collections are performed with Alyx (Fenwal, Inc.), Trima (Gambro BCT), or Haemonetics MCS+ 8150 (Haemonetics, Braintree, MA) systems. PLT procedures included plateletpheresis and plateletpheresis with infrequent plasma collection. PLT/plasma/RBC collections, plasma/RBC collections, and automated plasma and plasma/RBC collections were excluded from the analysis.

All adverse reactions occurring at the collection site are managed by collection staff, documented on the blood donation record according to the classification scheme (Table 1), and captured in a central electronic database. All donors are also instructed to contact the regional blood center if they experience problems or have concerns about their health after donation. Donor reactions or injuries reported by the donor or third parties after the donation event are managed by standard procedures, reviewed by a facility physician, and reported to the national hemovigilance program.

Classification scheme for donor complications

The standardized classification system for donor complications defines 15 reaction categories (Table 1). The scheme incorporates a severity rating (minor, major) for reaction types in most categories, and every category is further divided into whether or not the donor received outside medical care. Minor complications typically resolve within a short period of time (e.g., 30 min), and the donor recovers completely at the donation site and/or is managed solely by giving the donor instructions for care after an injury (e.g., hematoma) occurs. Major reactions typically require follow-up with the donor and review by ARC staff, either because they may be medically more serious or they may be more of a concern to donors (e.g., loss of bowel or bladder control during a short LOC), even if the reaction is not more medically significant than a minor complication. Presyncope defines a variety of symptoms (e.g., pallor, lightheadedness, dizziness, nausea) that may be related to vasovagal reactions, hypovolemia, or anxiety but do not progress to LOC. The small and large hematomas include true hematomas (e.g., a palpable mass), bruises, and infiltration at the venipuncture site. Reactions classified as "other" comprise a variety of

TABLE 1. Definitions of donor complications*

Complication	Brief description	
	Minor category	Major category
Systemic (syncopal-type): Symptomatic (presyncopal, pre faint)	Pallor, weakness, light-headedness, dizziness, diaphoresis, nausea/vomiting, no LOC.	
LOC	Short LOC: lasting less than 1 min.	Long LOC: lasting 1 min or more or complicated by seizures or convulsions or loss of bladder or bowel control.
Presyncopal or LOC with injury		Injury (e.g., head injury, fractures, abrasions, lacerations) associated with symptoms of pre faint or LOC.
Prolonged recovery		Symptoms of pre faint or LOC or other reaction that do not resolve within approx. 30 min.
Phlebotomy-related Hematoma	Small: involved area measures 2 × 2 in. or less.	Large: involved area measures more than 2 × 2 in.
Nerve irritation		Suggested by pain, tingling, numbness, or sharp shooting pains after phlebotomy.
Suspected arterial puncture		Suggested by rapid (<3 min) bleed time, pulsatile flow, and/or bright red blood.
Systemic (other) Citrate (automated procedures only)	Citrate reactions that persist despite intervention or are accompanied by additional symptoms such as nausea, muscle tightness, or cramping. Citrate reactions that involve perioral or peripheral tingling or numbness that resolves with reduced flow rate or calcium are not captured.	Symptoms of minor citrate plus prolonged or exaggerated muscle spasm (tetany), vomiting, chest tightness.
Allergic	Hives, itching, rash, or redness of skin.	Symptoms of minor allergic reactions, plus swelling of the face, neck, or throat; wheezing; or respiratory difficulty.
Other reaction	Symptom profile different from established categories (e.g., anxiousness, hyperventilation, headache).	Symptom profile different from established categories (e.g., chest pain, thrombophlebitis).

* Donor complications are classified according to type and severity (minor, major); cases in each minor and major complication category are further subclassified with respect to the need for outside medical care.

reactions or symptoms that do not otherwise fit into the established categories, including suspected thrombophlebitis and chest pain as major, other reactions. For every complication category, outside medical care is defined as medical advice or treatment provided by someone other than ARC staff (e.g., emergency medical services, a primary health care physician or specialist, or any health care professional), whether sought independently by the donor or at the advice of ARC staff. Donors may seek outside medical care for reactions that are common and self-limiting (e.g., large hematomas), as well as those that are medically more relevant to their well-being (e.g., syncope-related injuries).

National hemovigilance program

Every month, the hemovigilance program at the ARC National Headquarters Medical Office compiles and analyzes data on donor complications following WB and automated procedures that are either documented by collections staff at the time of donation or reported by

the donor or a third party after the donation event, including cases that receive outside medical care. All major reactions (Table 1) that occur at the donation site and all reactions that are reported to the blood center after the donor leaves the site are captured on a standard case report form, investigated, and reviewed by the blood center physician and reported in a tally on a monthly basis to the National Medical Office. If a donor is referred for outside medical care by staff or later reports that he or she sought or received care from any outside health care provider, the complete blood donation record is reviewed by the National Medical Office and is maintained in a separate database. In this report, the actual medical care provided is not further differentiated and varies considerably from simple reassurance or advice to apply warm packs for the resolution of hematoma to administration of intravenous fluids and hospitalization.

Complications associated with allogeneic WB, apheresis PLT, and R2 procedures in 36 regions from January 1, 2006, to December 31, 2006, were analyzed; autologous and therapeutic collections were excluded. The analysis

also excluded 49 WB collection events in which a citrate reaction was recorded because these records most likely represent miscoding or misclassification of complications after WB donation, as well as 43 PLT donations and 45 R2 donations recorded for 16-year-old donors. Donor age was not recorded for 94 WB and 2 PLT donations.

Complications experienced by donors before the donation process or unrelated to phlebotomy (e.g., injuries caused by other accidents at the site) or experienced by individuals who did not donate blood (e.g., canteen volunteers) were excluded from the analysis. The denominator for the number of donations of each procedure type was the number of satisfactory collections plus the number of incomplete ("quantity not sufficient") collections. Donor complication rates were calculated per 10,000 collections for minor and major complications and for cases receiving outside medical care for different donor age groups.

Statistical analysis

Complication rates for different procedure types and among different age groups were compared by calculating odds ratios (ORs) and 95 percent confidence intervals (CIs; InStat, GraphPad, Inc., San Diego, CA). Linear regression and analysis of variance for the correlation between the proportion of young donors and monthly complications rates was performed with computer software (SAS Version 9.1.3, SAS Institute, Inc., Cary, NC).

A multivariate logistic regression analysis was performed to identify demographic variables that were independently associated with complications after WB, R2, or PLT donations using software (SAS STAT, SAS Institute, Inc.). There was an inverse and nonlinear relationship between donor age and the rate of complications, and complications were disproportionately represented in donors under age 20 and fairly constant above age 20. Consequently, the multivariate analysis considered the donors in the age groups as 16-year-olds, 17-year-olds, young adults (18- and 19-year-olds), and adults in each subsequent decade (e.g., 20-29, 30-39, up to 80+). A "STEPWISE" selection method was used to determine which effects entered the logistic regression model and also which effects remained in the model. A significance level of not greater than 0.05 was necessary for an effect to enter into the model and a significance level of not greater than 0.05 was necessary for an effect to remain in the model at any iteration step. The regression analyses for WB, PLT, and R2 procedures evaluated the independent variables (regional blood center, donor age, sex, donation status) and the dependent outcome (any complication). Outlier regions that performed fewer than 150 procedures in 2006 were not reported (three regions) in the R2 model. The ARC Institutional Review Board determined that the research was exempt under 45CFR46, 21CFR50.

RESULTS

Donations and donor complications at regional blood centers

In 2006, the donor hemovigilance program analyzed a total of 6,014,472 WB, 449,594 PLT, and 228,183 R2 collections, which were associated with 209,815, 25,966, and 12,282 adverse reactions (348.9, 577.5, and 538.3 per 10,000 donation), respectively. Minor symptomatic (presyncopal) reactions accounted for the majority of complications (258.3 per 10,000 collections) for WB, and small hematomas, for PLT and R2 donations (377.0 and 217.9 per 10,000 collections, respectively; Table 2). Excluding large hematomas, the overall rates of major complications were 7.4, 5.2, and 3.3 per 10,000 collections for WB, PLT, and R2 procedures, respectively (Table 2).

Regional and monthly variability in complications after WB donation

The complication rates observed for WB donation in the 36 regions demonstrated considerable regional and monthly variability; the systemwide mean was 348.9 ± 140.7 (range, 145.9-679.5) complications per 10,000 donations (Fig. 1). The overall WB complication rates in the 36 regions were normally distributed and 24 regions were within 1 standard deviation (SD) of the mean, and 34 regions were within 2 SDs of the mean (data not shown). For adverse reactions recorded by collection staff, mean monthly rates of reactions at the donation site varied over a wider range for the small- and medium-sized regions (approx. 57,000-207,000 WB collections per year) compared to the largest regions (with >208,000 WB collections per year).

Complication rates across the system demonstrated seasonal variation that was most pronounced for WB donation and strongly correlated with donor age. Specifically the rates of systemic (syncopal-type) complications (i.e., presyncope, LOC, injury, prolonged recovery) and the proportion of young donors (16-19 years old) for WB and R2 donations were higher in the spring and autumn compared to the winter and summer, whereas the rates of phlebotomy-related complications remained constant throughout the year (Fig. 2A). Systemic (syncopal-type) complications after WB donation correlated strongly with the proportion of donors less than 20 years old ($R^2 = 0.96$) and logistic regression demonstrated that the model explains a significant portion of the variation in the data ($F = 248.00$; $p < 0.0001$). Monthly variation was substantially less pronounced for systemic (syncopal-type) complications after automated collections (Fig. 2B) and did not correlate as strongly with the proportion of donors less than 20 years old as observed for WB ($R^2 = 0.58$; $p = 0.004$); no correlation was observed for PLT donations ($R^2 = 0.03$; $p = 0.58$).

TABLE 2. Rates of complications after WB and automated collections per 10,000 donations

Complications	WB (6,014,472)	Apheresis PLTs (449,594)	R2 (228,183)
Systemic (syncopal-type) complications			
Presyncopal (symptomatic, pre-faint)	258.3	61.3	195.2
Short LOC	7.9	2.1	6.5
Major			
Long LOC	1.8	0.5	0.9
Prolonged recovery	2.4	0.8	1.0
Injury	1.1	0.3	0.1
Systemic (other) complications			
<i>Citrate</i>			
Minor		121.4	112.8
Major		2.2	0.4
Allergic (minor, major)	0.1	0.4	0.2
Other (minor, major)	0.6	1.0	1.0
<i>All systemic</i>			
Rate	272.1	190.1	317.9
Number of events	163,663	8,546	7,255
OR* (95% CI)	1.00	0.69 (0.68-0.71)	1.17 (1.15-1.20)
Phlebotomy-related complications			
Small hematoma	74.5	377.0	217.9
Major			
Large hematoma	0.4	9.4	1.9
Suspected nerve irritation	0.7	0.8	0.1
Suspected arterial puncture	1.1	0.2	0.4
<i>Phlebotomy-related</i>			
Rate	76.7	387.5	220.3
Number of events	46,152	17,420	5,027
OR (95% CI)	1.00	5.21 (5.12-5.31)	2.91 (2.83-3.00)
<i>All reactions</i>			
Rate	348.9	577.5	538.3
Number of events	209,815	25,966	12,282
OR (95% CI)	1.00	1.70 (1.67-1.72)	1.57 (1.54-1.60)
<i>Major reactions</i>			
Rate†	7.4	5.2	3.3
Number of events	4,443	232	76
OR (95% CI)	1.00	0.70 (0.61-0.80)	0.45 (0.36-0.57)
<i>Outside medical care</i>			
Rate	3.2	2.9	2.9
Number of events	1,903	132	66
OR (95% CI)	1.00	0.93 (0.78-1.11)	0.91 (0.72-1.17)

* ORs shown for univariate analyses compared to the rate for WB collections.

† Excluding large hematoma; univariate comparison of donation types.

Allogeneic WB donation and complications

The most common complications associated with allogeneic WB collections were systemic (syncopal-type) reactions (272.1 per 10,000 donations), most of which were mild symptomatic (presyncopal, pre-faint) reactions that occurred at an overall rate of 258.3 per 10,000 donations (2.5%; Table 2). Of the major reaction categories, the most frequently reported was prolonged recovery (2.4 per 10,000 donations) or LOC for more than 1 minute (1.8 per 10,000 donations). The overall complication rate decreased with increasing donor age (Fig. 3) for both first-time and repeat donors (data not shown).

Young donors (<20 years old) accounted for 874,922 (14.5%) WB donations in 2006 and had a significantly higher reaction rate than older donors (Fig. 3). An analysis of complications in these young donors is presented elsewhere.¹⁰ Multivariate analysis confirmed that regional blood center, age, sex, and first-time donation

status are independent correlates for adverse events (Table 3). Donor age was the strongest independent predictor of complications; the effect of age effectively leveled off above age 40, although the differences between age groups was still significant. Other variables, including donor race, height, and weight, were not available on all donations for inclusion in this analysis. The overall complication rate was lower but the proportion of small hematomas was higher in the older age group (>60 years) compared to younger age groups (Fig. 3).

Overall, 1,903 WB donors had outside medical care documented after a complication, for a rate of 3.2 per 10,000 collections. Forty-six of these donors reported hospitalization after donation. The observed rate of reported outside medical care after WB donation was higher after first-time (5.7 per 10,000) compared to repeat (2.6 per 10,000) donations (OR, 2.2; 95% CI, 2.0-2.4). Major

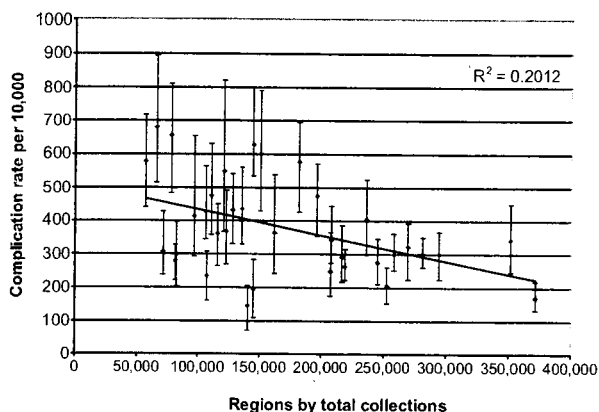


Fig. 1. Variability in rate of complications among ARC blood centers. The 36 regional blood centers are ordered by total collections in 2006 and plotted against their mean monthly overall complication rate per 10,000 collections. Bars show the maximum and minimum monthly complication rate for each center.

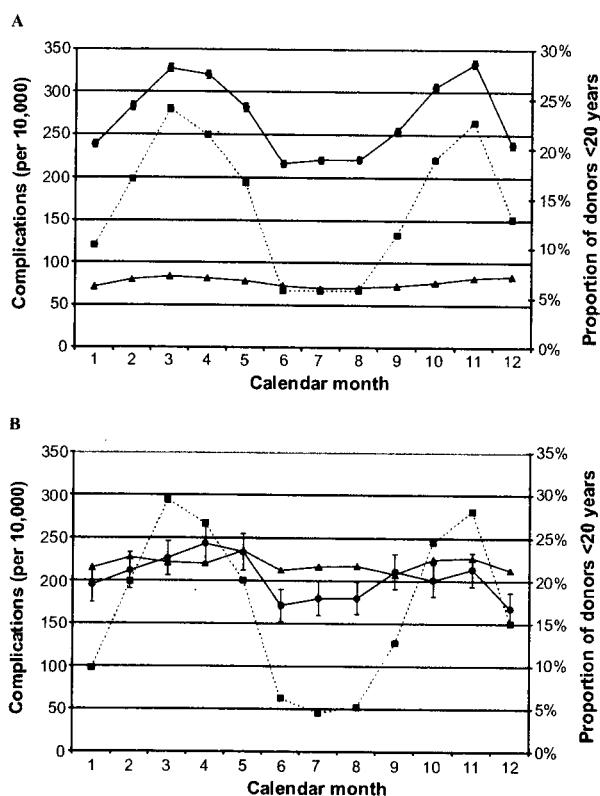


Fig. 2. Seasonal variability in donation-related complications correlates with the proportion of young donors. (A) WB; (B) R2. (●) Systemic (syncopal-type) complications; (▲) phlebotomy-related complications; (■, dotted line) proportion of donors less than 20 years old.

syncopal-type reactions (long LOC, LOC or presyncope with injury, prolonged recovery) accounted for approximately half (46%) of all reactions associated with outside medical care (Fig. 6A).

Automated collection procedures and donor complications

The most common complications associated with PLT and R2 donations were hematomas, followed by systemic citrate and syncopal-type reactions (Table 2). The rate of systemic reactions was lower for PLT donations (OR, 0.69; 95% CI, 0.68-0.71) and slightly but significantly higher for R2 donations (OR, 1.17; 95% CI, 1.15-1.20) compared to WB collections in a pairwise, univariate analysis (Table 2). The rate of major reactions, however, was significantly lower for both PLT (OR, 0.70; 95% CI, 0.61-0.80) and R2 (OR, 0.45; 95% CI, 0.36-0.57) collections. The rate of outside medical care was not significantly different for PLT and R2 (2.9 per 10,000) collections compared to WB (3.2 per 10,000) collections (Table 2).

As with WB donation, younger donors were more likely to experience complications after PLT (Fig. 4) and R2 (Fig. 5) collection, but the influence of age on the rate of donor complications was considerably less pronounced. Multivariate analysis confirmed that regional blood center, age, sex, and first-time donation status are independent correlates for adverse events (Table 3). Age was a strong independent predictor of complications, but there were no differences in complication rates in age groups above age 50 for R2 and above age 30 for PLT donation. Significant differences were observed among regional blood centers.

The observed rate of reported outside medical care was not different for WB (3.2 per 10,000) compared to automated procedures (2.9 per 10,000), but the composition of reaction types differed. Phlebotomy-related complications (large hematoma, possible nerve irritation) accounted for 39 percent of outside medical care reported after automated collections (Fig. 6B). Eight of these 198 donors reported hospitalization after donation.

DISCUSSION

A safe and adequate blood supply encompasses efforts to minimize the risk to the blood donor as well as the transfusion recipient. The present analysis represents the first report of the comprehensive ARC donor hemovigilance program. The data confirm the overall safety of blood donation and provide an estimate of risk currently associated with allogeneic WB and automated collection procedures. We have used the data internally for program and procedure development and have shared the data externally with various organizations to evaluate the impact of regulatory guidance and inform public policy. For

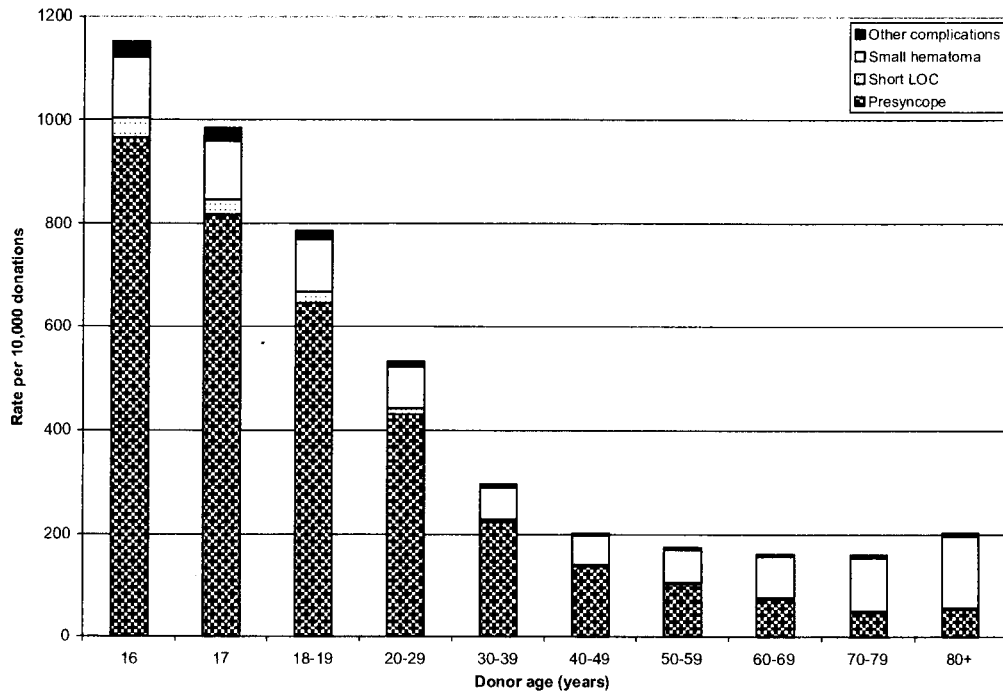
TABLE 3. Multivariate logistic regression analysis of donor complications

Effect	WB		R2		Apheresis PLTs	
	Point estimate	95% Wald CI	Point estimate	95% Wald CI	Point estimate	95% Wald CI
Age (years)						
16	3.42	3.14-3.73	NA	NA	NA	NA
17	3.33	3.07-3.62	2.94	1.56-5.55	1.77	1.37-2.28
18-19	3.11	2.87-3.37	3.02	1.60-5.70	1.69	1.37-2.08
20-29	2.25	2.07-2.44	2.83	1.50-5.33	1.30	1.08-1.56
30-39	1.33	1.22-1.44	2.30	1.22-4.33	1.06	0.88-1.28*
40-49	0.95	0.88-1.03*	1.95	1.04-3.67	0.90	0.75-1.08*
50-59	0.84	0.78-0.92	1.84	0.98-3.46*	0.92	0.77-1.11*
60-69	0.80	0.73-0.87	1.81	0.96-3.41*	0.95	0.79-1.14*
70-79	0.80	0.73-0.87	1.69	0.89-3.23*	0.84	0.70-1.02*
80+	1.00 (referent)		1.00 (referent)		1.00 (referent)	
Sex						
Male	0.56	0.55-0.56	0.64	0.60-0.68	0.53	0.52-0.55
Female	1.00 (referent)		1.00 (referent)		1.00 (referent)	
Donation status						
First	2.00	1.98-2.02	1.33	1.25-1.40	2.04	1.83-2.28
Repeat	1.00 (referent)		1.00 (referent)		1.00 (referent)	
Region						
A	0.90	0.86-0.94	3.61	2.72-4.80	1.99	1.75-2.26
B	2.00	1.90-2.10	1.18	0.16-8.83*	2.25	1.94-2.62
C	0.90	0.86-0.95	0.88	0.65-1.19*	0.98	0.85-1.13*
D	1.11	1.06-1.16	1.90	1.42-2.55	1.52	1.34-1.72
E	0.82	0.78-0.86	1.15	0.86-1.54*	1.83	1.61-2.08
F	2.12	2.01-2.24	5.34	3.72-7.68	1.58	1.34-1.85
G	2.46	2.35-2.58	3.52	2.60-4.77	2.48	2.18-2.83
H	0.84	0.80-0.88	1.00	0.72-1.38*	1.54	1.35-1.76
I	0.54	0.51-0.57	0.89	0.66-1.19*	2.12	1.87-2.40
J	0.85	0.81-0.90	1.18	0.87-1.60*	2.72	2.34-3.15
K	1.96	1.87-2.06	1.56	1.16-2.09	2.54	2.20-2.92
L	1.25	1.19-1.31	1.68	1.25-2.26	3.15	2.77-3.58
M	1.10	1.05-1.16	1.15	0.82-1.63*	1.68	1.45-1.96
N	0.44	0.42-0.47	0.26	0.18-0.36	2.13	1.82-2.48
O	0.82	0.78-0.86	NA	NA	0.75	0.64-0.88
P	1.40	1.33-1.46	NA	NA	1.37	1.20-1.57
Q	0.59	0.56-0.62	0.44	0.32-0.60	1.35	1.17-1.55
R	1.20	1.14-1.26	2.80	2.04-3.83	2.47	2.14-2.84
S	0.79	0.74-0.84	0.46	0.29-0.72	0.09	0.04-0.20
T	0.93	0.89-0.98	2.76	2.07-3.69	0.64	0.54-0.77
U	1.39	1.32-1.46	1.70	1.25-2.32	0.13	0.10-0.19
V	0.94	0.89-1.00	0.74	0.52-1.04*	2.98	2.55-3.48
W	1.98	1.89-2.07	2.00	1.49-2.67	1.84	1.61-2.10
X	0.62	0.59-0.66	0.24	0.16-0.37	2.29	1.95-2.68
Y	2.39	2.27-2.52	4.13	3.07-5.54	2.22	1.91-2.56
Z	1.24	1.17-1.30	1.91	1.39-2.63	0.81	0.70-0.94
AA	1.36	1.29-1.43	1.39	1.03-1.87	2.22	1.93-2.55
BB	1.33	1.27-1.40	4.53	3.37-6.08	2.69	2.35-3.09
CC	1.10	1.04-1.17	0.83	0.57-1.19*	0.44	0.34-0.56
DD	1.64	1.56-1.71	1.77	1.32-2.39	2.06	1.79-2.38
EE	1.30	1.24-1.37	1.01	0.70-1.45*	1.01	0.86-1.19*
FF	1.05	0.99-1.12*	1.24	0.91-1.70*	0.03	0.01-0.07
GG	1.10	1.05-1.15	1.81	1.35-2.43	1.44	1.26-1.63
HH	2.15	2.04-2.26	NA	NA	1.07	0.86-1.35
II	0.69	0.65-0.73	0.42	0.28-0.65	0.55	0.46-0.65
JJ	1.00 (referent)		1.00 (referent)		1.00 (referent)	

* Not significant.

Our experience also delineates the limitations of a national hemovigilance program and identifies opportunities for future improvement that may be tracked by the program. The approach to classify the type of complication rather than to capture specific signs or symptoms simplifies data collection, but we recognize that our definitions of donor complications are not mutually exclusive;

for example, donors in the prolonged recovery category may also have had LOC as a feature of their reaction. This redundancy leads to having more than one code that can be used to describe a reaction; in addition, more than one type of reaction is possible. In both circumstances, staff is instructed to record the reaction based on the most severe symptoms. This subjectivity in evaluation and



Donor age (years)	16	17	18-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80+
Total donations	46,274	404,033	424,615	812,190	822,429	1,319,311	1,314,912	616,876	223,185	30,553

Fig. 3. Rates of donor complications associated with allogeneic WB donation. The overall rates are significantly ($p < 0.05$) different between each successive age group, except between the 60- to 69- and 70- to 79-year age groups.

example, the lower rates of serious reactions with automated PLT collections compared to WB collections served as the basis for a response to the FDA draft guidance on collection of PLTs by automated methods¹³ to demonstrate that additional requirements for medical supervision at the collection site were unwarranted and would unnecessarily restrict PLT collection and availability. These data support the conclusions reached by others that plateletpheresis is associated with the lowest rate of systemic reactions compared to other collection procedures.¹⁴

The AABB has proposed the establishment of a national biovigilance program that would include a donor adverse reaction component.¹² The national collection of donor complication data is currently constrained by the different definitions of reactions and data collection procedures in use by blood centers in the United States, which prevents direct comparisons between the complication rates reported by various blood collection agencies. We now demonstrate that even in a large multicenter system utilizing standardized protocols, considerable variability is apparent in reported reaction rates among different regional blood centers. Reaction rates are known to vary with donor age, gender, race, weight, and first-

time donation status.⁶⁻¹⁰ A major source of the variability we observed between regions relates to donor demographics, as evident by the strong correlation of higher reaction rates with the higher proportion of young donors in spring and fall compared to summer and winter. Nevertheless, we show that the blood region was also independently associated with complications separate from donor characteristics (age, donation status, and sex), suggesting that regional practices may affect the likelihood of reactions or the recognition and reporting of those reactions. Regional variability likely cannot be eliminated because of the inherent subjectivity in evaluating and recording donor complications. Any comparison of complication rates between different regional centers, for example, to evaluate staff performance or compare collection equipment, could be misleading. Despite the variability among regions, data from an individual region or a small subset of regions in a more controlled operational trial have proven useful to evaluate donor complications associated with implementation of new collection procedures or new equipment (data not shown). Further analysis of the regional variability may provide insight into practices consistently associated with lower complication rates.

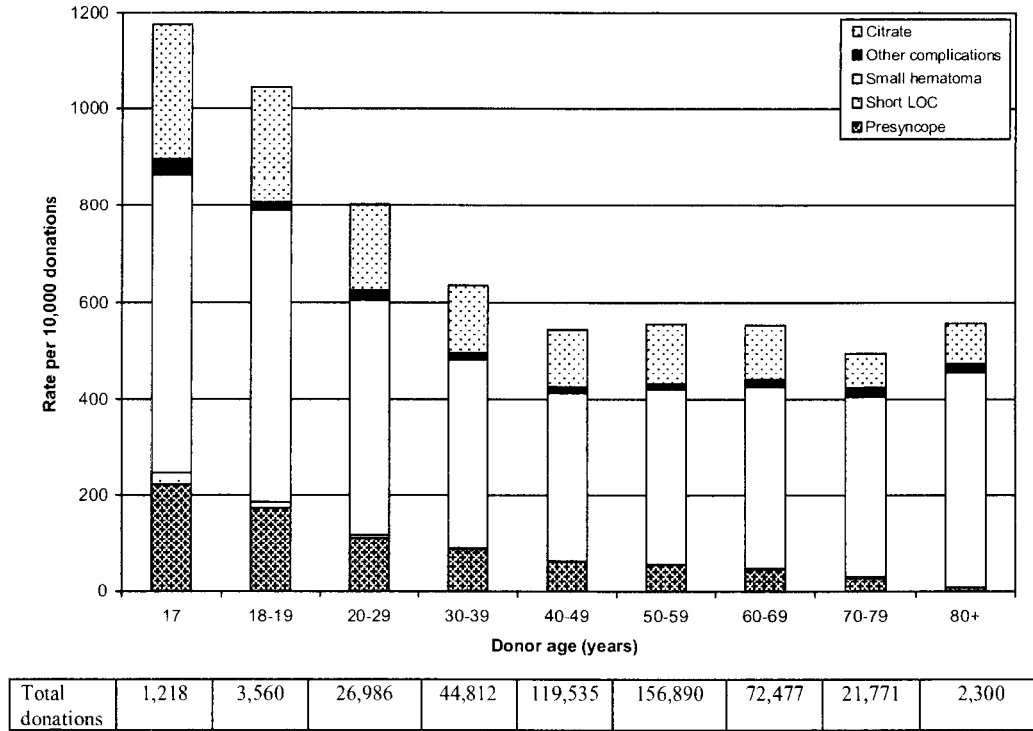


Fig. 4. Rates of donor complications associated with apheresis PLT donation. Differences in overall rates between successive age groups are different ($p < 0.05$) between 18- to 19-, 20- to 29-, and 30- to 39-year groups.

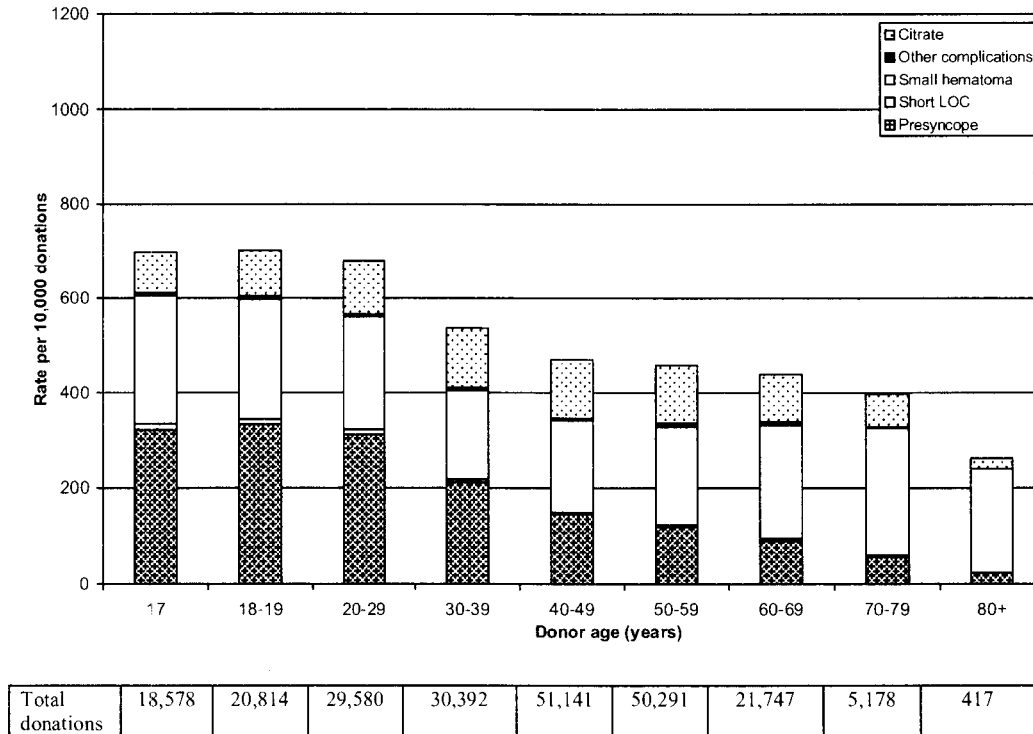


Fig. 5. Rates of donor complications associated with R2 donation. Differences between overall rates between successive age groups are significant between the 20- to 29- and 30- to 39-year groups only.

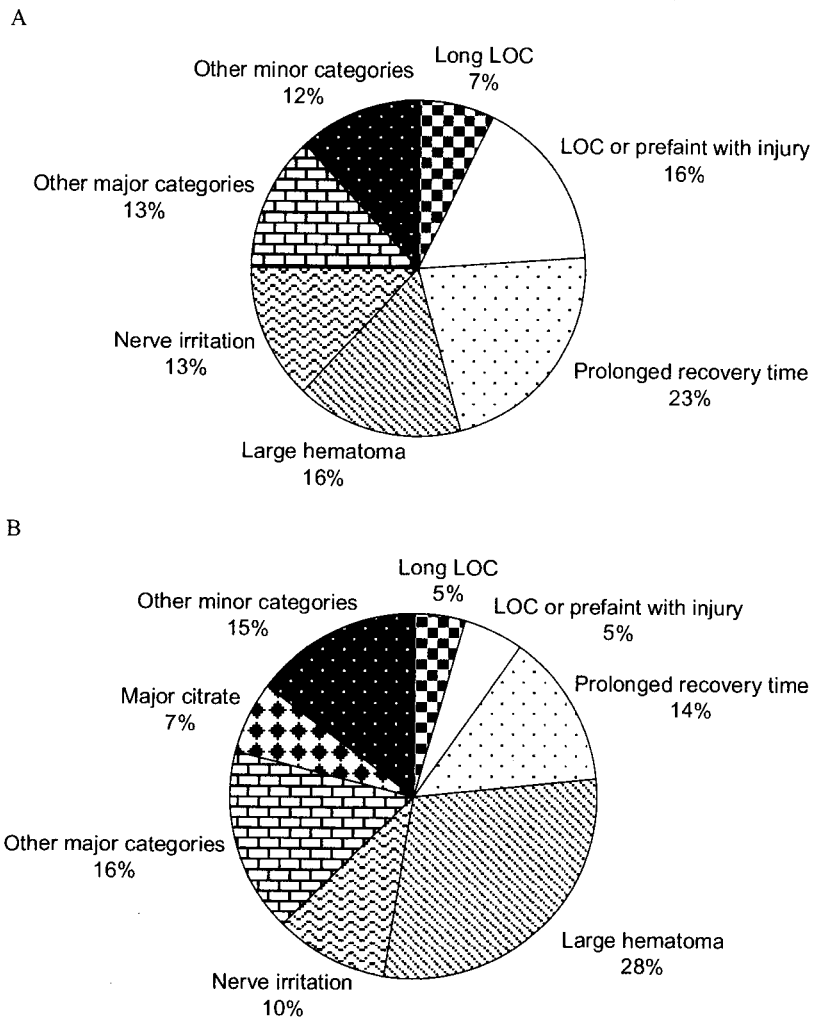


Fig. 6. Outside medical care reported after WB (A) and automated PLT and R2 collections (B). (A) WB (1,903 cases of outside medical care in 6,014,472 total WB collections; 3.2 per 10,000). (B) Automated (PLT, R2; 198 cases of outside medical care in 677,777 total automated collections; 2.9 per 10,000).

imprecision in coding undoubtedly contributes to regional reporting variability.

The utility of collecting systemwide data on hematomas and minor presyncopal reactions and the relevance of a distinction between short LOC and long LOC have been questioned. Hemovigilance efforts of a national system should be focused on moderate and severe reactions, which are more medically relevant than minor complications and require aggregation of data to evaluate trends and the effect of interventions on rare events. However, the common, minor reactions may provide important information if their rate serves as an indirect measure of the risk of more serious complications in individual blood centers. For example, an intervention that achieves even a small reduction in symptomatic (syncopal-type) reactions

may predict a comparable reduction in the infrequent, but more serious syncopal-type complications including LOC with injury. This assumption, while logical, has not yet been proven because a large data set is needed to evaluate the effect of any preventive measure on infrequent but medically more serious complications. Regardless, even the common, mild complications are unpleasant for the donor and reduce the likelihood of return donation thereby serving as a surrogate measure of the donation experience.¹⁵⁻¹⁷ Finally, we noted lower complication rates in young donors (<20 years) donating RBCs by apheresis compared to WB donations, providing a rationale for further study and for possibly expanding apheresis RBC donation programs in colleges and high schools.

Although blood collection establishments will likely not be able to eliminate all risk to healthy volunteer donors, they should continually foster a culture of safety and make a concerted effort to reduce the rate of donor complications, not only for the donors' health and well-being but also to enhance the likelihood of their future donation.¹⁷ The ARC hemovigilance program provides estimates of the current risks associated with WB and automated collection procedures and lays the foundation of our efforts to improve the donation experience. Establishment of a national donor hemovigilance system may afford an opportunity for systematic improvement in donor safety in every collection center. Our experience, however, cautions against direct comparison of different blood centers in the absence of risk adjustment for donor demographics and consideration of differences in the identification, classification, and reporting of injuries.

REFERENCES

1. Popovsky MA, Whitaker B, Arnold NL. Severe outcomes of allogeneic and autologous blood donation: frequency and characterization. *Transfusion* 1995;35:734-7.
2. Kasprisin DO, Glynn SH, Taylor F, Miller KA. Moderate and severe reactions in blood donors. *Transfusion* 1992;32:23-6.
3. Ogata H, Inuma N, Nagashima K, Akabane T. Vasovagal reactions in blood donors. *Transfusion* 1980;20:679-83.

4. Shehata N, Kusano R, Hannach B, Hume H. Reaction rates in allogeneic donors. *Transfus Med* 2004;14:327-33.
5. Poles FC, Boycott M. Syncope in blood donors. *Lancet* 1942;240:531-5.
6. Trouern-Trend JJ, Cable RG, Badon SJ, Newman BH, Popovsky MA. A case-controlled multicenter study of vasovagal reactions in blood donors: influence of sex, age, donation status, weight, blood pressure, and pulse. *Transfusion* 1999;39:316-20.
7. Tomasulo PA, Anderson AJ, Paluso MB, Gutschenritter MA, Aster RH. A study of criteria for blood donor deferral. *Transfusion* 1980;20:511-8.
8. Newman BH, Siegfried BA, Buchanan LA. Donor reactions among African-American and Caucasian first-time whole-blood donors. *Transfusion* 2005;45:1398-9.
9. Newman BH, Satz SL, Janowicz NM, Siegfried BA. Donor reactions in high-school donors: the effects of sex, weight, and collection volume. *Transfusion* 2006;46:284-8.
10. Eder AF, Hillyer CD, Dy BA, et al. Adverse reactions to allogeneic whole blood donation by 16- and 17-year-olds. *JAMA* 2008;299:2279-86.
11. Zou S, Musavi F, Notari EP, Fang CT. Changing age distribution of the blood donor population in the United States. *Transfusion* 2008;48:251-7.
12. AuBuchon JP, Whitaker BI. America finds hemovigilance! *Transfusion* 2007;47:1937-42.
13. Guidance for Industry and FDA Review Staff: Collection of Platelets by Automated Methods [monograph on the Internet]. Rockville (MD): U.S. Food and Drug Administration, Center for Biologics Evaluation and Research (CBER), Food and Drug Administration; 2007 Dec [cited 2008 May 24]. Available from: <http://www.fda.gov/cber/gdlns/plateletauto.pdf>
14. Wiltbank TB, Giordano GE. The safety profile of automated collections: an analysis of more than 1 million collections. *Transfusion* 2007;47:1002-5.
15. France CR, Rader A, Carlson B. Donors who react may not come back: analysis of repeat donation as a function of phlebotomist ratings of vasovagal reactions. *Transfus Apher Sci* 2005;33:99-106.
16. France CR, France JL, Roussos M, Ditto B. Mild reactions to blood donation predict a decreased likelihood of donor return. *Transfus Apher Sci* 2004;30:17-22.
17. Custer B, Chinn A, Hirschler NV, Busch MP, Murphy EL. The consequences of temporary deferral on future whole blood donation. *Transfusion* 2007;47:1514-23. 